

「甲斐奴も胸うちあけて眞一文字に御返答を申し上げまする、いつぞや参上の砌に館様より御内意の趣、その御内意に基き、一の關の三萬石に本家の幾分を削り添へて公然の諸侯になり参らせん事は、拙者一存にて必ず事を運びませうが、現在の綱宗を退けて勤けとは案外の仰せ、もしその儀ならば譬へ奥州五十四郡を賭物に致しても、はッ、罷り成りませぬ可矢八幡」

「さらば伊達の一家一門、もしや天變地異の外に於て斷絶するやうの事あつても、さらに後悔ないと申さるよか」

「御念に及ばず、さりながら天變地異の外に於てとは、いづれ人間業と心得まする、はよ人間業の敵に御坐れば然のみ怖ろしからぬ敵、かつまた太閤といひ神君と申し古今を通じて凡人ならぬ方々の御前にさへ會て不覺の名を取らざりし伊達政宗が家筋、忽ち亡ん

で草叢と相成りまするには」

「たゞ一朝一夕の人事では叶ふまじと安堵めさるよか、しかと左様で御坐るか、元來が他人の手に取らする事でもなく、今も足下が口より申されし政宗殿が一子の人に、いはど同じ鹽の水を片端と片端へ揺り動かして傾くるも同然、一滴も地に滾す事ではなし、さるをその鹽、がばと覆して雫も残らぬやうに相成つても後悔せずとは」

「そこを申し上げるまでのこと、そもく何人が、誰が手をかけて鹽を覆しまするや、入らざる無用の御骨折あそばさるよ御姓名まつ伺ひたし石田殿」

をりしも活氣の雅樂頭、もはや堪らず座を乗り出でて兩の拳を握りながら、
「その鹽に手をかけて、ざんぶと覆すものは予ぢや、かくいふ酒井雅樂頭、見事敵に取つて見をるか」

原田甲斐さまも冷かに笑を含んで雅樂頭の面上じろりと見上げながら、

「恐れながら、御所望と御坐れば何時たりとも、奥州四十八館の徒輩を率ゐて御指圖の場處まで推参いたすべき甲斐が心底」

いひつゝ雅樂頭を睨んで刻み膝に近寄りむとする不敵の猛氣に、石田彌右衛門するくくと入り來りて其袖しかと掴みぬ、

「甲斐殿、甲斐殿、いづれへ進まるよぞ、かく控へしは石田彌右衛門忠國」

「御前の御膝元へ進んで今一應、只今の御意を慥めむがため、身に寸鐵も帯びざる甲斐で御坐る、但し無禮失體としての御止立か」

飛ぶ鳥おとす天下の大老職酒井雅樂頭が頭上より浴せかけたる眞一文字の難題、其横合より隙間もなく斬り込んだる出頭の石田彌右衛門、その中に座を占めて目色も變へず思ふまよに

吐いたる原田甲斐、あはれ日本三大名と唄はれたる奥州伊達家の盛衰浮沈も今夜この一席に迫るのみか、一語を過ち一句を誤れば忽ち天下の大事を惹き起さむとする最後の鏖、果は三人うち寄つて人しれず如何なるところにや打ち込みけむ、

雅樂頭が最初よりの一徹に當主の綱宗を押退けて分家の兵部を立てむとするに決したるか、たゞしは甲斐が多年の一物この機に乗じて天下取の幃幄に参ぜしか、あるは石田が才智に事の急劇を危みて他日の密議に譲りしか、乃至また二事もろとも一先づ打消したるか、兎にも角にも無事に歸られまじき原田甲斐が、あれほどまでに思ひ切つたる互の争論を忘れつゝ、山海の珍味に微酔を帯びて出でし不思議さよ、

下馬先の大門ふりかへりながら、例の兩若黨と草履摺みを従へたるまよ、悠然として歩み出せし甲斐が面色、大膽不敵さすがの男なれど今は敵の座にもあらねばや、をりく眉を擡む

ることあり片頬に笑を含むことあり、果は大地を踏む足音も平生に變りて荒々しく、さてはまた思はず立止まりて思案に沈む體、つき從へる家來までも形の影に習うて息を殺しつと、やうく汐留の屋敷まで立歸りし時、甲斐はじめて聲を出しぬ、

「や今日は終日、御苦勞であつた」

つと門を入りて我屋敷へは歸らず、正面の二重門より殿中の玄關に上り行けば、待ち受けし諸士いづれも迎へ出でて休息の室に送りつと、三四人の重役ことに坐を並べて甲斐を取圍みながら、公然に大老より召されたる今日の仔細、しかも終日の御用とは前後に例なき事、そもく何事で御坐ると膝を進めて問へば、甲斐しづかに會釋して兩眼を閉ぢぬ、閉ぢたる兩眼より男泣きの涙はらく、ほつと大息ついていふ、あはれ伊達家の最後と相成りましたわ、

公然の使者をもて大老の屋敷へ呼ばれたる甲斐、今かくと待ども更に音信なく、さりとて相手が當時の天下も心のまとなる下馬將軍、みだりに人橋かけて催促もなるまじと、重役三人、額を鳩めて評議まぢくの夜に入りて後、甲斐が歸り來りて別室に大息つきながら、あはれ伊達家の最後と成りましたわとの一言に、いづれも腸くつがへりて、顔色さつと青ざめぬ、

山河顛倒の大事に出逢ふとも動くまじき不敵の甲斐が、歸るや否や大息吹いたる體といひ、當家の最後と言ひしのみか、閉ぢたる兩眼より男泣きの涙はらくと落せしかば、三人もろともに膝を進めて原田殿々々、といふ聲さへも打震ひぬ、

甲斐やうく頭を擡けて、握れる兩の拳を膝上に置きつと聲を潜めていふ、

「今朝大老へ召されて、そのまよ一日を空しく客室に捨て置かれたる後、夕暮の燈火ころ、や

うく呼び入れられ、儲あらためて嚴重に申されし次第は、其方主人綱宗殿は近來いかにしてか多病のよし、殿中の取沙汰いつしか上の御耳に入り、過日この雅樂への御言葉に、いざといはど一手を以て東北の警固とも頼むべき伊達家の當主が、左様の多病人にては叶ふまじ、幸ひ聞けば政宗の一子に兵部とやら申す分家なく、達者人のよし、まづその者に後見させては如何にとの御意、なれども大家の事といひ且は雅樂が縁類にかゝる兵部ゆゑ、そと内々に申し入るゝが其方はじめ一藩の考量は何とである、もしや手後れして公然の御沙汰なきうちに、雙方の都合よろしき臍を固めて置けとの次第」

きくより三人の重役おもはず眉を擧めつゝ、膝おしつめて甲斐を中央に取圍みながら、「して原田殿は、何と御受けいたされしか、一藩の都合取は儲置き、わざく召されし御支配役の御手前、そのまよの無言では」

「勿論、役儀の表、身分の程より不肖ながら甲斐が意見として、その義ならば奥州五十四郡を賭けても御受いたし難しと返答申せし時、聞き及ぶ活氣の雅樂殿が顔色さつと變つて、もしや伊達家の礎ゆらぐ事あつてもかとの憤言に、甲斐も容を申め詞に念を入れて、藩中の者どもは兎も角も、召されし甲斐が一存は弓矢八幡かくの通り、もし心憎き奴と思し召さば無用の御手数にも及ばぬ事、このまよ御前に於て御存分の御憤怒を受けるまでと、生命一つを抛け出しての返答に、さすがの樂雅殿も聊か案外に思はれてや、すつと無言に奥へ入られしあとは、酒井家出頭の石田彌右衛門なる者と甲斐とが二度目の談判、それさへ最後は互に意地を張り抜いての睨み別れ、仔細かくて御坐れば各々方も思ひ切つたる腸を押し据ゑて、たとひ如何なる大事ありとも決して動かぬ御用心専一、何分にも天下の大老に黑白そのまよの言葉を返して立歸つたる甲斐、いづれ無事には濟むまじき覺悟よりも、わけ

て藩中の一致が大切で御坐る、素破といはど眞先に目星の分家殿を、や、なよ何を左様に驚かるよ、ものよ大小輕重には誰人も用捨いたさぬ原田甲斐、それとも甲斐が言葉に打つべき點あらば、各々方の白刃にかよつても仔細なし」

いひつゝ肩を怒らし眼を見張つて息を呑んだる風情に、三人の重役おもはず首を縮めぬ、

原田甲斐が大老へ召されて、いたづらに終日を待たせられたるさへ抑々當家不首尾の兆、しかも歸り來つて重役三人へ甲斐が男泣きの涙ふくんでの物語、まづ此場かぎりにせられよと念を押せしかど、いつしか一藩に漏れ聞えて忽ち鼎の沸くが如くに騒ぎ立てぬ、

御身は一代お家は末代、大木の下には立寄れ長きものに巻かれよとは世上の諺、第一が筋目なき他家より入つて後見するでもなし、當殿様に取つては正しく伯父君の兵部殿、また今は大

老の縁者たるこそ却つて僥倖、わづかの意地を立て抜かむとて可憎ら大家の亡びし凡例を追はむよりは、萬事そのまよの御受けいたされて後の方便もあるべし、兵部殿とて老體の義なれば一切いちくの指圖も叶ふまじく、また老の前途さのみ長かるまじ、とは十の七八まで鬢に白髪の年輩、しかも妻子眷族の多きものが言葉なりける、

や、奇怪々々、失體千萬、何を死に損ひ奴が吐しをる、五體いづこを押して其音が出るぞ、天下の直參衆とて千代田の城の石垣めいたる三河以來の腰巾著さへ、もはや各その家風を立てよ入らざる他人の嘴を曲折るに、そもく相傳恩顧の家來筋でもなき伊達の礎、薩摩に島津、加賀に前田、奥州の當家とて日本三大名の隨一に唄はるよのみか、全くは徳川殿の客分たる五十四郡の領主國司に對うて、眞向おしつけの嚴命などとは笑止の至極、弓矢八幡このまよ聞く耳持たうや、たとひ政宗公以來の大廈高門ぐわらりと潰れて小田の蛙の棲家と

なるにせい、東北生育の武士が秋水三尺、やをれ味を見せたし、まづその血祭りに骨なき藩中の老耄を叩き斬つて國元に引揚げむとは、十の七八まで血氣の徒輩が躍り上つての大聲なりける、

藩中の兩派おのゝ名代を選んで、たゞ一人の原田甲斐に迫りつゝ、宛ら左右より袖を掴んで動かぬのみか、また駈け抜けの老輩は夜更け人定まつて後、竊に來つて只管ら當家萬歳の義を祈れば、また一騎駈けの武者眼を血に染めて、曉の枕を襲ひつゝ、大夫々々この期に及んで長詮議は無用の事、あはれ何をか憚らむ、分家殿の寐首を掻き取つて一擧に事を治めむのみ、一人やり損はどまた一人、續いて二人三人五七輩、およそ百人の死骨抛け出せば分家殿ばかりか、飛ぶ鳥おとす天下の大老とて梵天どれほどの事あらむと、傳來の白刃を叩いて迫るもあり、さては黨を結び友を集めて本國に馳せ行き所謂る伊達家の四十八館を呼び起さむとする

もありて、今にも脚下より大事の湧き出でむとする真最中に、根本目星の原田甲斐いづこへ往きしと思へば、例の駒形の隱宅に身を横へて小諺の一節、

危機一髪、あはや大事に及ばむとする藩中の騷動を知らず顔して、駒形の隱宅に小諺を唄ひし原田甲斐、宛ら白刃の上に夢おどろかぬ不敵の振舞、悠々として空ふく風の面を撫づるほどにも見えす鐵牛の角を蚊の刺すほどにも見えざれど、誰か知る心は稻妻、人にこそ言はね氣は張弓、流石に其夜は睡らざりけむ、終夜ら枕のきしる音のみして殘んの燈火かすかに家外は東天やうく白み渡るころ起き出でつゝ、香を炷いて床柱に身を凭せながら、おもはず撃むる眉には奥州五十四郡の盛衰興廢をかけぬ、
沈思默座の體やよ一時ばかり、家内の雨戸ひきあくる音を聞きて後、甲斐しづかに起つて廁に

行かむとや、川添ひの庭に對へる縁端を傳ふ折しも、前夜より船を繋いで潜みけむ棧橋の木戸に隠れて覗ひけむ、さつと吹く疾風に連れて木葉の舞ふが如く、閃く白刃もろとも身を翻して大の曲者眞一文字に躍り來りぬ、

矢聲と共に閃く白刃は斜に柱を削つて板縁ふかく斬り込みし間一髪、得たりと片脚あけて蹴付けたる甲斐が早業に、曲物おもはず轉んで大地に控と仆れぬ、

されどこの曲物、甲斐ほどの大力早業に蹴飛ばされながら勢ひ込んで斬り込みし板縁の白刃を失はず、控と大地に轉ぶや否、むくと起き直つて再び眞向に振り翳しつよ、御免なりませ原田殿と又もや斬り込む面上を見れば、絶えて久しき菅野小介が死物狂ひなりける、

や、おのれかと甲斐そのまゝ柱を取つて身の前楯としながら睨みつけたる面魂に、流石の小介も南無三寶、わづか一本の柱が百鍊の鋒に支へられたる心地して、右よりせむか左より

せむかと、血眼を張つて覗ふ横合より飛鳥の如く躍りかよりしは氏家平六、肩口いさよか斬られながら土砂を跳ね飛ばして無手と引組みぬ、

小介は忍術に得たる五體の活動、しかも据物斬の達人といひ死物狂ひなり、されど氏家平六また江戸三界に鳴り響いたる男として一度は天下の大老に召抱へられ後には出頭の石田に頼まれたるほどの男、一方は兵部が知己の恩に捨てたる生命、一方は愛著の涙に流したる生命、大力と大力、早業と早業、さては決死と決死、

をりしも奥より走せ來つて甲斐が手に一刀を渡したるもの、誰かと思れば平生は鼠の音にも怖るゝ露が一所懸命の顔色、甲斐おもはず笑を含んで、や、出來しをツた、

菅野小介が死物狂ひの初太刀やり損ねて、大地に蹴られながら刹那の一跳ね、むくと起き直つ

て又もや飛び掛らむとすれば、南無三寶、さらぬも剛敵の甲斐は柱を取つての一呼吸、しかも思はぬ横合より鬼に等しき大兵の髯男、なれども小介もはや生命は捨物、然しツたりと引ツ組んで互に満身の力業、えい／＼聲を出して捻ぢ合ひぬ、

奥より露が走せ來つて渡せし一刀、甲斐そのまゝ手に取つて縁端に立ちながら、

「氏家なんとぢや、手に合ふか、合はずば助太刀せうぞ」

御無用、御無用、かほどの奴にと叫びながら平六が懸命の活動に、流石の小介も刀は取失うたり本尊の敵を脱して氣は焦ツたり、主客の勢すでに分れて危き折しも、こは如何に棧橋の木戸を攀ぢて又もや飛び込み來らむとする曲物一人、甲斐それと見るより一刀すらりと抜いて断け隔つれば、その曲物おもはず大地に跪いて聲を勵しながら、

「御免なりませ、これは神もつて御敵對いたすべきもので御坐らぬ、只今それにて御家來衆

の組み敷かれし曲物に、息の根のあるうち用事を果さむとて推參いたせしもの、御不審と思召さば斯の通り、垣乗り越えし罪は後刻にて御成敗」

腰の一刀そこへ抛け出して平六に聲かけぬ、

「や、その者の一命だけは暫時の御用捨、もし御手に餘らば御手傳いたしてなりとも捻ぢ伏せまする間、生命の段は平に／＼」

いひつゝ駈け寄つて小介の片腕ぐいと捻ぢ上げながら、

「菅野氏、いざ約束ぢや、もはや叶はぬ瀬戸際、あらためて観念せられい」

小介くるしの大息ほつと吐いて、今は更に争ひもせず、わざと左右の手を取らせながら甲斐に對うて目禮を施しぬ、

「御身様に對ひし仔細は、あらためて申し上げずとも御承知あるべき筈、なれども武運つたな

く力足らいで斯くの曉は、萬事もはや諦め申した、ついでには小介が最後の御願ひ、もとより一命抛け捨てたる身、いづれの手に死するも同じ事ながら、只今これへ飛び込み來りし此男に勿論、御疑念を晴らさむがため、御面前にて斬られまするの覺悟、よし御身様を首尾よく打つた後にも此男に生命は呉れる約束にて、竊に伴ひましたる小介、あはれ一期の御情には、利慾のために白刃を弄ばぬ小介奴に、なほ一入の武士めいたる最後を賜はるやう、只管願ひ上げまする、委細は此男より改めて申し上ぐべし、それ包まず語られい」

死物狂ひに斬り入つたる菅野小介が、仕損じたる二の手の曲物ごさんなれと思ひの外、原田甲斐に對うては忽ち腰の一刀を抛け出し、氏家平六を助けては共に走せ寄つて小介を取控いだる體、しかも小介が俄に觀念の胸を押し据ゑて、あはれ同じ死する生命を此男に取らせたとの懇願、甲斐しづかに首肯いて縁端に腰うち掛けながら、平六が手を許させて小介に對ひつゝ、「や、珍らしいの小介、なれども面白い最後を取り居つたわ、汝も天晴れ武士の一人ぢや、儲その男の素性いづぞや語つた吉田某とやら、今日まで生命を預け置いた兄の敵の討手であらうがな」

はつと小介、そのまゝ大地に亂髪の頭を摺つて膝行り出でながら、「御賢察の通り、かつて汐留の御屋敷へ推參いたせし歸途、不意に呼び掛けられしは斯れなる男、小介國元出奔の砌、君命の仕手に選ばれて追掛け來りしを返討にして立退きしより六年目の其舎弟、なれどもさる人の知己の恩に感じて御身様といふ武士冥利の的を控へし小介が一身、しばらく生命あづかつて、もしや仕損じたらば同じ死すべき一命たしかに貰うて得させむ、仔細うち明けなば必ず聞き届け下さるべき御人ぞと、相伴うて昨夜の深更に

棧橋へ舟を繋ぎ斯の始末」

いひつゝ見返れば、かの男さらに慇懃の頭を下けて額越に、

「拙者ことは伊賀の産、吉田周作とて、これなる小介がために討たれたる者の舍弟、たとひ君命の仕手として力足らず返り討に逢うたる不覺は不覺ながら、さて六年目の此頃、現在そのまゝ無事の小介が姿を見ては弓矢八幡さらに堪忍ならぬ武門の意地、第一が同胞の血筋、されど元來が私の怨恨より起りし義でもなく、かつは小介また武士冥利に叶うたる大事を抱へし身と聞き、まづ今日まで其まゝに預りし生命、何卒この拙者に賜はらば生涯の御恩、小介に取っては天晴れ義理死の最後、拙者に取っては亡兄への手向草、御人品を見かけ參らせて斯く御願ひ上げまする」

甲斐しづかに打聞いたるまゝ氏家平六を招いて何事かを私語り、そのまゝ無言に奥へ入りし體、小介周作もろともに見送りて眉を顰むれば、平六さし寄つて聲を潜めながら、
「御兩人まづ浴みして後、改めての座へ、主人殿さて何事か内々の御談合あるよし、いざ早く、拙者御案内いたさうわ」

酒井家の出頭石田彌右衛門が知己の恩に感じて、あたり武士を我から路頭の袖乞に落しつゝ生命は固より無きものとして、もし叶はずば刺し違へむとまで乗り切つたる氏家平六さへ、思はぬ娘が愛著の羈に曳かれしとはいひながら、竟に志を翻して甲斐が掌中の物となり、今また伊達兵部がため日夜の心身を碎いて工夫さんぐの果に、死物狂ひとなつて躍り込んだる菅野小介、さては伴うて一命つきなむ際に約束せし亡兄が仇討の吉田周作まで、以上三人いづれも當世稀有の不敵者が、何とかしけむ人しれぬ一室のうちの甲斐が本心を説かれて互に

怨みを解き仇を忘れつゝ、あはれ斯人のためには今までの恩を捨て義に代へても働かむとぞ誓ひぬ、

世間普通の義理もて主従の縁を繋ぎ者は利慾のために馳せ参じたる百人の味方よりも、死骨
抛け出して我を刺さむとせし血眼の男二人、しかも亡兄が手向の白刃を捨てよまでの一人、
この三人を得たるこそ身に取つての喜悅、たのみある兵の交りぞと例の一節おもしろけに
諒うて結心の酒を呼びぬ、

分別の底は深けれど酒量の底の浅き甲斐、おもはず盃の数を重ねて其まよ身を横へつゝ、
幾刻か假寝の夢や辿りけむ、やがて目を覺せば日脚すでに傾きぬ、

いざ今夜は已み難き用事あり、夕暮の流れに茗を煮ながら舟にて歸らむといへば、その舟よ
りも早く露が片頬の笑を浮べて、お許しのあるところまで送りたしとの顔色、甲斐しづかに

首肯いて棧橋に立出でつゝ、あの三人を此家に残し置かば千人の強盗おし入るとも更に氣遣
ひなし、いざ來よ諸共に、この川水の絶ゆる果まで乗り行かむとぞ戯れて、浮べ出す一艘の
屋形舟、甲斐みづから棹さして心にもなき里謠を唄へば、露は揺られながら茗を煮て、ゆく水
の流れに浮世は何處ぞと知らず顔なり、

花なき時の花、月なき夜半の月、流るゝ水に心を清めて笹の葉越に蟲の音を聞きつゝ、小謠
の節おもしろく、うたよねの夢しづかに、萬事を浮世の外に構へたる駒形の隠宅も、いつしか
仔細らしき事むづかしの住家となりて、氏家平六といひ菅野小介といひ吉田周作といひ、荒
木の仁王を作り損ねたらむかと思ふばかりの鬚男三人まで起臥して、たま〜甲斐が來る毎
には酒の相手さては暮の敵手また物語の伽に、露が何とやら恨み顔なるも呵しく、廚の用に

我から追はれて腹立たしき氣色も一入をかし、
 甲斐それと見て心に猶更ら呵しく、こりや露よ、此頃は不意の珍客が増して賑はしい事ぢや、
 定めて和女も萬事の心丈夫また彼等が艶もない物語の端いと珍らしく面白う嬉しからむと
 戯るれば、露は思はず顔を反けて片頬の笑を浮べながら、何事につけても足らはぬ身一つ
 で、とどかぬ愚鈍さを君のみかは、しらぬ彼人達にまで笑はるゝが恥づかしくて、そのまよ
 起つて廚の方へ遁け入る後姿、あはれ罪も報いもなし、
 夜更け人定まりて後、閑寂なる奥の一室に例の三人が、甲斐を取圍んで何事か密議を凝らす
 體、かゝる席にも露のみは心許されて給仕に召使はれつと、折々は聞くとともに耳おどろ
 かす怖ろしの言葉もあり、おもへば身の毛たちて悪魔の私語くが如き心地もすれど、世にあ
 るかぎり册き參らせむとぞ祈る君がごと、また十九の春秋めぐりくつてこゝに逢ふ瀬の生み

の父さへあり、かつは斯れほどの大事を漏れ聞いても餘所には洩らすまじき女と、思はるゝ
 だけに一入うれしいやら心苦しいやら、たゞ獨り用なき時は燈火かよけて物の本に氣を紛ら
 せども、あゝ何となう此ごろの胸さわぎ、

たとひ仙臺屋敷を草叢にして蟲の音を聞くと、大老の一言に度を失うて忽ち累代の家風を
 破らむこと、そもく何の面目あつて江戸の市中を往來すべき、踏まれて花咲くものは野邊
 の猫草、夜半の嵐に散るや櫻の武士は今ぞと叫んで、しきりに大刀の柄を叩く血氣の藩士お
 よそ三百餘人、その中の頭領十七人、
 御身は一代お家は末代までの大法も辨へず、物の輕重さへも知らず、駈け出す無法の片意地は、
 張り抜けてからが素人細工の出來合提灯、おのが脚下を照らす用にもなるまじとて、仔細氣

の老輩およそ四百人、その中の頭領十五人、
 主家興廢の大事、藩士存亡の利那、時の猶豫もなるまじ、片時の待ち草臥れに可憐ら力癩が
 勿體なしとて、雙方いづれも勢ひ込んで迫りし在原田甲斐が、いづこに往きけむ飄然とし
 て姿を隠せしより、宛ら釣り上げし魚を水際に取りられし如く、互に睨み合うて待つこと二日、
 三日目の朝また飄然として歸り來りぬ、
 待ち受けし原田が歸り來りしと聞くより、佐々木と梶原が宇治川の勢ひ、劣らじ抜かれじと
 競ひながら、血氣組の頭分十七人、みづから御爲筋とぞいふ老輩組の先達十五人、いづれも
 甲斐が玄關口で落ち合うて互に片脚を式臺に踏み掛けつよ、たのむ、たのむの聲まづ争ひか
 かりぬ、
 かくと兼て覺悟の原田甲斐、取次をもて靜に制しつよ、これは方々なんと心得ての騷動ぞ、

かりにも一藩の支配役たる玄關口へ血相かへての多人數、しかも案内なきに片脚ふみかけて
 の押合とは奇怪千萬、もしさほど差迫りし用談ならば雙方一人づつ靜に入來あるべし、但し
 其座に於て確答の相成るべき人物を選んで罷り越さるべし、さるを猶ほ今日そのまよにて御
 引取なくば甲斐みづから立出でて揃ひし向脛の林を薙ぐべしとぞいはせぬ、
 否といはど殺しても應ぜざる男、斬るといはど飛び來つて鐵の柱をも斬るべき男、なまじひ
 押し返して過誤せむよりは、さらば雙方ともに譲り合うて、おのゝ一人の名代を差出さむ
 とて、血氣組より選ばれしは岸澤兵庫當年三十二歳、御爲筋より選ばれしは渡邊五左衛門當
 年四十八歳、いづれも藩中に聞えたる家柄と男振とを備へぬ、

血氣組と御爲筋と互に競り合ふ際合より、また駈け抜けて本國に走せ歸りつよ、かくの次第か

くの仔細、いざや御家の一大事出来、本尊の敵は正しく分家の兵部殿、その後楯は天下も心のまよなる權威無上の大老酒井雅樂頭、さらば當家に取って萬一や一步を誤れば忽ち不覺の底に落つべき間一髪、支配役の原田殿のみにては事むづかし、わけて生來の膽魂張り過ぎて古今ふしぎの不敵人なれば、かよらむ時の指圖には却つて危しくと、いはゆる本國伊達の元老と聞えたる四十八館、さらぬも原田甲斐が多年江戸一切の兎角を握つて仙臺名物と唄はるゝを妬み顔なる人々の耳驚かせしかば、宛ら薪に油を注ぎし如く、ばつと燃え立ちて一大評議とぞなりぬ、

かほどの大事を今まで我々に夢さら知らせざる甲斐が心中いぶかし、これ第一の不審、たとひ彼奴いかほどの才智ありとて自己一人が功名に耽つて思ふまゝに振舞ふこと身を先にして主を後にする次第、これ第二の失體、まして一般の向背を定め得ずして斯く本國までの駈拔注進に逢ふこと、これ第三の不覺、まづ此の三件を處分して後しづかに我々が分別の臍を固めむとて、四十八館のうちより圖取に選ばれたる伊達家の元老九人、白石の城主片倉小十郎を先達として、涌谷の城主伊達安藝、つゞいて伊達安房、伊達上野、石川駿河、蘆名刑部、天童五郎次郎、鮎貝靱負、里見遠江、いづれも陪臣ながら天下の諸侯に聞えて將軍の手許までも屈書の出でたる人々、おのゝ四五人づつ譜代恩顧の家來を召連れて、仙臺より江戸まで九十里の行程を、早くば五日路おそくとも六日路に行き著かむとて差急ぎぬ、されど九人のうちの片倉小十郎のみ何とか思ひけむ、俄に病氣ありとて白河口より引返しぬ、これぞ原田甲斐と並び唄はるゝ伊達家の雙龍、しかも此度出京の先達、いかなる仔細やあると残る八人いさゝか眉を擧めしが、さて今更ら心弱くて叶はじと、しのびくゝに路を急いで奥州街道の栗橋幸手杉戸を越えて、今や粕壁の松原まで來かよる折しも、路傍の葭簀か

けたる茶屋の軒より一文字笠に旅装束の武士一人、ぬツと現はれ出でて街道の中央を立塞ぎぬ、八人の同勢いづれも眼を注いで何者ぞと見れば、思ひきや江戸にあつて日夜の肝膽を碎くべき筈の原田甲斐、草鞋ふみしめて片頬に笑を含みぬ、

御家の一大事、一藩の浮沈、輻射の急を救ひ得ずして枯魚を市に買ふの遺憾なからむとて、先達たる片倉小十郎は病と稱して途中より引返せしかど残る伊達家の元老八人、涌谷の安藝を筆頭に天童五郎次郎を萬事の殿に、おのゝ一命に代るべき恩顧の郎黨四人づつを従へて總勢四十人、仲間下郎を合して百餘人、家も生命も此秋と奥州街道の粕壁まで押し來りし折しも、道傍の松影に霞簀かけたる茶屋の軒より思ひも寄らぬ原田甲斐たゞ一人、ぬツと現はれて無心の微笑を含みし體に、流石の八人あきれて言句なし、

甲斐しづかに歩み寄つて會釋しながら、まづ伊達安藝の身邊に近う、

「これは御老體を始め、いづれも歴々うち揃うて俄の御出京、そもく如何なる大事が本國に起りましたやら、安房殿、上野殿、右川、蘆名、鮎貝、里見、天童の方々、まづ御健勝にて御意を得まする」

あくまで恍けて空うそぶきつゝ、わざと逆様に本國どれほどの大事出來せしぞと問ひ返したる面魂、身は多年の的に規はれて加之も今回の大事に當りし一人なり、相手は生命の掛替四人づつを引連れて血眼に押し寄せ來りし百餘人の主従なり、たとひ甲斐いかほどの武者男なりとも殺さば忽ち殺されて人しれぬ街道の草の根を肥すべき危機一髪の只中に、宛ら野狩の腰辨當を落したる顔色もなし、

されど斯く元老八人まで打揃うて俄に押し來るほどの事なれば、いづれ仙城の一代評定をな

したる上のこと、それにしては白石の片倉小十郎が見えざる訝しさよ、彼奴一人ならば此人が一團となつて必死の活動せむよりは遙に勝るべきを、わざと本國に歸つて先づ江戸表の色合を量り我力を試みて後、しづかに冷笑を含んで出で來らむとの心中、おのれ心憎き奴ながら、善惡ともに手を取つて語るに足るべきは彼奴一人のみ、いざやこの八人を此まよ追ひ返して彼奴に一泡ふかせし上、糸もて引くが如く改めて招き寄せくれむぞと、早くも腰を固めて顔色を和らげつよ、いよく慇懃に會釋すれば、惘れし八人の中より天童五郎次郎すよみ出でて差寄りぬ、

「これは原田殿、久々にて御意を得ます、わけて年來の御役義さぞかしと御苦勞千萬、ついでには此度我々が打揃うて俄の出京は江戸表より一大事出來の注進あつての事、聞くが如き御家の御多用最中よくも此處まで、我々を出迎への義ならば御邊みづから來せらるよに

も及ぶまじきに、はて御丁寧過ぎたる事ぢや」

いひつゝ甲斐が面いかにと見れば、原田一流の肩を崩して呵々と打笑ひぬ、

おもひもよらぬ原田甲斐が粕壁の村外れに待ち受けて、ぬツと立現はれつゝ八人の元老を喰ひ止めし勢ひに、雙方いさよか言葉に角を立てよ目色を變へしが、大事の前の小事いづれも主家を思うて殊更に打解け、幸ひ路傍に葭簀かけたる茶屋の母屋を借り受けつゝ、召連れし供人は門邊の松原に憩はせて、さしあたり此家を入しれぬ密議の場所とぞなしぬ、

茶屋の婆が驚き顔に汲み出す溢茶、おのく手に取つて咽喉を濕しつよ、原田甲斐一人を取圍んで八人のうちより、まづ筆頭の伊達安藝が口開きに、事もし難かしからばと殿役の天童五郎次郎、いづれも肩胛張つて目の玉を光らしぬ、

「甲斐殿、多年江戸表一切の呼吸に馴れて加之も御手前ほどの器量人が、用心ぶかき工夫の手より漏れ聞えしからは、いづれ尋常ならぬ一大事の浮沈と存する、まづ分家の兵部殿は儲置き、およそ天下も心のまよなる酒井家が太老の勢ひをもて後楯せらるゝ上は當家に取つて由々しき大敵、かつは藩中の面々も二派に分れて何とやら穩和ならぬとの事、じたい此末の成行を如何めさるゝ覺悟にや、我々かく打揃うて俄の出京も全く其事がためて御坐れば、一應の御挨拶、承はりたい」

いひつゝ膝を進むれば甲斐しづかに首肯いて、一座の面上すらりと見渡しつゝ、
「不肖ながら江戸の奉行役たる拙者より未だ何等の御沙汰もいたさぬに、そもく何者が御注進に依つて斯くも歴々うち揃うての仰々しき御支度ぞ、なるほど、兵部殿が本家に押し直らむとする企望は今更の儀でなく、凡そ數年來の大望、幸ひ近頃は酒井家に縁類を持た

れて一入その野心を固めたる體、なれども高が兵部殿の事、いはゞ殆ど巻の迷ひ犬奴が俄に飼主を得て物の影に吠ゆるも同然、はよよよよかく太平の世に何程の儀を出來し申すべき、下馬將軍とて天下の大法は曲けられず、かつは將軍家の家來筋、その段は我こそ將軍家の客分筋、たゞ太老といふ役儀の面を振り翳しての儀に御坐れば、原田甲斐一人にて事の足るべき敵手、なんぞ元老の方々を遠路わざ／＼煩はすほどの大事なるべき、藩士二二派に分れしも唯これ一時の事、静めむと思はゞ一朝片手の業ながら、わざと知らず顔に打過ぎて何とやら門外に聞ゆるは却つて當家の僥倖、いさよか敵に對うて權威に怖れぬ用意の聲で御坐るわ、はよよよよ兎も角も原田甲斐が首となつたる後にこそ、世に聞えたる奥州四十八館の方々を始めて煩はすべき一大事ありと思召さるべし、甲斐が無事に罷り在るからは弓矢八幡、よしや天下を敵に申し受けても國元より江戸まで九十里の行路を來らるゝ

までの日取は、憚りながら必ず御受合いたさう、さるを猶かく當家の元老うち揃うて、奉行役の拙者いまだ無事なるにも拘らず俄に仰々しい御支度は却つて敵に糧を送るの道理、およそ日本國中の街道々に公儀よりの隱密を配布せることは、よもや御承知のなき筈はあらまい、但し甲斐一人にては江戸表の掛引に覺束なしとの御用意ならば、あつて用なき拙者、この坐に於て方々の白刃にかよらうまで、安藝殿、上野殿、安房殿、石川、蘆名、鮎貝、里見、天童の方々いかゞで御坐る、もし殿様の御機嫌を伺はむためならば時も時なり、かく打揃はず、おのゝ一人づつ靜に通らつしやい、はよよよ何奴かは知らず駈け抜けて本國の方々へ御注進せし者、もしや敵の術に落ちしか但し策略あつての儀ならば何とせらるよ、家柄にも名にも叶はぬ軽々しい御舉止、あまり御用意すぎては却つて御無用意、と先づ甲斐は斯うも存するぢや、はよよよよよ

仙城の元老とて世に聞えたる奥州の四十八箇より圖取をもて選ばれたる八人おのゝ四人づつ生命の掛替までを引連れて、家も身も大事は此秋と血眼に押寄せしほどの勢ひ、街道の砂煙を立てつゝ上下の主従百餘人が急ぎの歩調に驚いて飛び出すものは路傍の蝗のみと思ひの外おもはぬ粕壁の村外れより原田甲斐が飛び出して、流水の辯を揮うたる理解に打たれ天下を一呑みにせし膽魂に遮られて、心ならずも又こゝに二度目の評議を凝らしぬ、つまり原田奴を無きものとして疾風の如く押し行かむか、但し彼奴に此上江戸の失體を重ねさせたる後、あらためて四十八箇一時に押し上らむか、

いづれ君を思ふ心に二派なけれど、さもなき事を我より荒立てよ此上の難題に逢はむとならば、いざ八人の面々一時も早く江戸に押し上るべし、もし最後の大事を取つて眼前の小事を無事に治めむとならば、八人の方々いざ一時も早く本國に引返さるべし、利害得失の工夫と成敗

浮沈の方便は公等の選ふところ、原田甲斐はこれにて御免候へと言ひ放ちたるまゝ、すつと起つて茶屋の門邊に出づれば、いつのほどにか萬事の用意やしたりけむ、さし招く片手もろとも屋後の松影より現はれたるは四挺の街道駕、いづれも脛腰達者の大男のみが肩を揃へて、しかも第一番に乗り出したるは氏家平六、武者髯かいなでつゝ大目玉ぎろく、左右を睨みぬ、第二番は原田甲斐みづから懐中より物の本を取出して繻きぬ、第三番は菅野小介、大刀を左手に衝き立てゝ右手の片腕は駕の外まで張り切りぬ、第四番は亡兄の仇まで忘れて諸共に隨身せる吉田周作、いざといはど眞先掛に飛び出して何事かせむの面魂、四挺の駕いづれも絲もて繋ぎしが如く江戸の空を望んで越ヶ谷の方へ飛び行きぬ、流石の八人あつと呆れて互に顔を見合せつゝ、今更おもへば先達の片倉小十郎が俄に虚病を構へて途中より引返せし胸の一物、これもまた何とやら、もしや江戸と國元に時も時なり人も人なり彼奴等二人が心を合して事

を通するならば、それこそ天下を敵にうけて四面に楚歌の聲を聞くよりも幾層倍の由々しき大事、はて何とせむ、八人こゝに兩分して四人は此まゝ江戸に押し上り四人は此まゝ本國に引返し、一方は原田が心中の穿鑿、一方は片倉を試みむ工夫、もし彼奴等に一點なりとも不審の義あらば互に取つて押へて其場に刺し殺さむとは天童、蘆名、石川の言葉、されど筆頭の伊達安藝のみは兩腕しづかに組んで老の眼を閉ぢ、安房、上野、里見の面々は顔見合せて息を吐くばかり、あはれ甲斐が今ごろ街道駕に揺られながらの顔色や如何なりけむ、本國白石の城中に引返せし片倉が偕も其後の心中いかなりけむ、

今朝は粕壁の村外れに忽然と立現はれ本國より押し上らむとせし八人の元老に一泡ふかせつゝ、九里の行程たゞ一足飛び、はや其日の夕は駒形の隠宅に身を横へながら逝く水の流れを誘

ふ小論の節おもしろく、原田甲斐またこゝに尋常の浮世男となりける、
露が運ぶ夜食の膳に對うて、片頬に笑を浮べながら箸を上けての諧謔、こりや露よ、この鯛
奴が和女の手料理にかゝる時、あはれ何とか悲鳴をあけて叫びはせざりしか、うらめしの眼
中なほ生きたる如く睨みをるぞよ、一寸の蟲にも五分の魂魄、まして鯛は魚中の王位、され
ば古の式にも年いまだ二十歳に足らぬ女が庖丁にかけむとする際には必ず亦物を冷水に清め
姐の兩端に手をつかへて、おもふ殿御が大事のゑぞ許してたべと言葉をかけるが法ぢや、も
しその法を知らで料理する女は生涯およそ子を持つこと叶はぬといふ、こりや露、和女は何
とした、定めて其まゝ押へ切りにかけてでがな、さればこそ、この鯛奴が猶うらめしの顔色
を備へ居るわ、なれどまたこれを打消す法もあるぢやといへば、例の無邪氣なる露おもはず
柳眉を擧め小首を傾けながら、その法は何としてと問ふ風情に、外でもなし、まづこの鯛の

骨を一つも失はず取揃へて小函に藏め、其身が寢床より異の方に當れる庭の隅に葬りなば、た
とひこれまで幾尾を料理せし怨恨も一時に消えて、やがてまた子を孕むこと疑ひなしと語り
し翌日、試みに庭を見れば、おのが臥房より異の隅の横の繁れる木影に人しれず葬りけむ、
さよやかなる土饅頭の上に細き木の札を建てよ、お鯛さま南無阿彌陀佛と記せし女筆に、さ
すが甲斐ほどの武士も何とや思ひけむ、兩眼うるみて小聲に泣きぬ、あはれ世に女の數もあ
り男の數もあるものを、かゝる男に斯かる女、なんとして縁を持ちけむ、さても行末いぢら
しの女や、有徳の町家にも嫁がいで、

粕壁の村外れに遮つて八人の元老に一泡ふかせつよ、いふだけの事を言ひ吐くだけの音を吐
くや否や、忽ち駕を飛ばして駒形の隠宅まで引返したる原田甲斐、さても我立去りし後席の評

議を何とか固めけむ其後の進退いかにしけむと、竊に人もて探れば、おして江戸に上りしものもなく忍んで入り込みしものもなく、あはれ八人をめく打揃うて又もや本國へ歸りしとの次第に、甲斐おもはず手を拍つて高笑ひしながら、さもさうす然もありなむこと、いざや改めて來るべきは白石の片倉小十郎一人、ござんなれ、彼奴ならば善惡ともに手を取つて語るに足らむ逸物ぞと、宛ら傳來の矢の根に鼻膏ひいて待ち掛けたる勇士に似たり、其後の一夜、原田甲斐おもふ仔細やありけむ、大老酒井家の出頭石田彌右衛門を訪うて、奥まりたる一室に膝つき合せながらの物語、いづれの世も天下に表立ッたる大事の前には先づ人しれぬ利物と利物との私語より起りける、

「さて石田殿、天下の御政道をあづかり給ふ御當家ほどの御威勢を以て、かくせよ斯うせよと申し渡されし義は上意も同然、其日その場で御即答申し上げいでは濟まぬ筈を、今日ま

で我等分別の御猶豫を下さるゝこと、全く貴方様といふ御人品あればこそと、甲斐ふかく御禮の心體、ついでには其後の仔細いさよか御耳まで」

「や、お言葉は却つて痛み入る、不肖ながら石田彌右衛門、もし御便利と相成る道も御坐れば折角お働き申す間、なほ腹藏なく」

「いよくその御言葉に甘へて申し上げれば、御當家様よりは唯の御一言、いはど却つて伊達家の繁昌を御最下さるゝ事ながら、さて石田殿、井の底の蛙は大海の浪を知らぬ比喩で、草叢ふかき田舎生育の武士根性として、すはや主家の一大事、存亡浮沈の瀬戸際と心得、藩中さまよくに分れて日夜に立騒ぐ果は、聞き傳へて本國より重役の元老ども、まづ伊達安藝を筆頭に、安房、上野、石川駿河、蘆名刑部、里見遠江、天童五郎次郎、以上八人の徒輩が血眼となつて」

「や、四十八館の人々が押し上られしか」

「押し上らむと致して奥州街道の粕壁まで罷り越しましたるを、拙者まづ馳せ迎へて段々と利害を解き聞かせ、そのまゝ追ひ歸しは歸せしものよ、もしやこの事が御當家様の御耳に入り、御尋問を蒙つては甲斐なほさら以て重々の恐れ入る次第と存じ、豫め御断りのため」

「それは御念の過ぎた御届け、さりながら伊達家に聞えし面々は其八人の衆ばかりでも無ければ、いづれまた二の手の人々が」

「御意の通り、彼等八人は先づ追ひ歸しましたれど、甲斐が推察では、二の手として出府いたすべきもの一人」

「それは如何なる人ぞ」

「御聞き及びもあるべき筈、白石の城主として片倉小十郎なるもの」

「なに、片倉殿が出府せらるゝとか」

「いや、しかとは申し上げかねますれど、安藝はじめ天童の徒輩が八人引返せし後詰として、小十郎ならで叶はぬこと、甲斐また小十郎ならば互に手を取つて熟談もいたすべく、

ついては自然さしつまりての御返答も申し上げらるべく、この邊もまた御届けのため」

いひつゝ石田の面上を見れば、たゞ一人の甲斐さへ手にあまるを、更にまた聞き及びし片倉奴が出京と聊か何とやら呆れ顔なり、

原田甲斐と並び唄はれて仙臺の雙龍といはれしは白石の城持三萬石片倉小十郎とて、伊達家中興の祖たる政宗を助けて天下を覘ひ損ねし不出來の段が、なほ日本三大名の其一に築きあげたる功臣の隨一、草を敷寝の昔を忘れざるため子孫相傳へて小十郎と名乗るの外は事むつ

かしき名を許さず、しかも其家風は諸家他門と異なりて、生れ落つれば家臣の中より百石以上三百石以下の文武ともに正しき十八人を選びつゝ僅に五十石の扶持を添へて一年づつ代るゝに養はせ、いざ十八の男となりし曉に始めて三萬石の世取に引直すの一流、されば代いづれの時の小十郎も面魂おのづから世に秀でて天晴れ伊達家の礎と呼ばれぬ、しかも當時の片倉小十郎は松之助の幼少より人品骨柄わけて凛々しく、あはれ政宗公の世に生れ逢はざるを惜まるゝほどの男なれば、四十八館の老輩も唯この人を萬事の先達と仰ぎつゝ、當年とつて三十九歳、その妻女は仙城隨一と呼ばれたる美人にて、原田大藏が愛女の澤これぞ正しく甲斐が妹なりける、

小十郎、一夜のこと、妻女の澤を奥の一室に呼び入れつゝ、四邊の者を遠ざけながら膝すり寄せ聲を潜めていふ、

「今更ら物めづらしう言はずとももの事ながら、そもく片倉家は代々伊達家の脇立となつて、事なき時は殆ど無役同然の閑職なれど、もし事ある時は真先かけて火水にも飛び入るべきの家格ぢや、さればその片倉家に嫁となつたる女も、また世間なみくくの婦人では相濟まぬ道理、いや夢さら和女をもて小十郎が妻に叶はぬといふ義ではない、たゞ和女は原田家の娘、しかも正しく江戸一切の奉行役たる甲斐殿の妹なれば、念のために申し置くぢや、小十郎もしや伊達家のために甲斐殿を無いものとせば和女なんと思やるぞ」

いひつゝ妻女の面じつと見遣れば、描ける如き柳眉を擧めて、何とやら恨めしげの兩眼いきいきと張り切りつゝ、さて更に躊躇ふ氣色もなし、

「さてく愚の身は、かうも情無き仰せを聞くものかや、原田家の娘、また甲斐が血を分けし妹の澤、なれどそれは十八の暮までのこと、十九の春こゝへ嫁りてよりは、正しく片倉

小十郎が妻の澤、年來とどかぬ我身を恥ぢて家風に馴染まう外には何事も心を寄する暇とは、ましてや館様の御ため兄が如何やうになりませうとも」

「そであらう、さう無うては叶はぬこと、但し甲斐殿と小十郎と差向うて、伊達家の爲でもなき一私事の争論より互の刃傷、いや我もし彼を刺し殺さば和女いかに思やるぞ」

「もしや、その座に我身あらば、事の仔細は俵おいて、及ばずながら片倉の妻、御手を助けて原田をせめて、一太刀なりとも」

大きくより小十郎おもはず首肯く兩眼に涙ふくんで、それ聞けば安堵、その心根に此白石城を暫時の間は和女にあづけて、近きうちに心置きなう出府せむとぞいふ良人の顔を、妻も流石に顔を反けながら、いかなる仔細あつて兄の甲斐を然ほどに憎み給ふとも問ふ事ならぬ胸の苦しき、さても弓矢取の家には人しれぬ血の涙ぞ多かりける、

あれほどの勢ひに打揃うて馳せ上りし八人の元老、いかなる仔細あつてか原田甲斐が一言に説き伏せられたるまゝ、忽ち踵を返して粕壁より引返しときくや否や、さもさうづ、さもありなむ、甲斐は心も腕も稻妻の如き當世不敵の器量人、八人の元老は唯一筋に物固きばかりを大事の面々、何として互角の相撲が取らるべきぞ、いざや我ことに二の矢を繼ぐの役目となりにけり、甲斐また善惡ともに我を待つべき筈と、流石は奥州名物の片倉小十郎、俄に

白石の居城を打立ちて仙臺の本城に向ひぬ、

馳せ歸りし八人の元老が使者を途中に追ひ戻しつゝ、お招きに及ばず白石の小十郎、只今登城と觸れ込みしかば、いづれも亦なんとやら鼻先を捻られし體、されど其まゝ出で迎へて休息の暇もなく政宗が城中の一隅に遺したる武者堂として仙臺の一大評場に集りしは、四十八館の

人々に詰合の重役を合して凡そ百二十七人、

その中より八人の筆頭伊達安藝すよみ出でて、粕壁の村外れに甲斐と出合うたる仔細、我等また大事の前の小事と思つて俄に引返せし心體かくの如しと、つぶさに語つて自己が席に入れば、蘆名刑部また進み出でて満座を見渡しながら、今更ら辯を弄して無用の工夫を凝らすに及ばず、つまるところの詮議、たゞ恐るべきは大老酒井家の權威を翳して横に振舞ふ分家殿よりは、面魂といひ器量といひ當世無二の原田甲斐が酒井家に對する心中の厚薄如何にありと、思はず眼を上げて小十郎の席を睨みぬ、さては過日の出府に八人を外して途中より引返せしを恨むが上に、また合せて甲斐が妹婿たる我に疑心ありと、小十郎しづかに笑を含んで容を改め坐を迂り出でながら、
「一座の御老輩いづれもの御心體を伺うての上、あらためて小十郎などは唯その御用は承は

るべき筈ながら、幸ひ今それにて蘆名殿の申されし御一言、いかにも時に取つての大切と存する、分家殿が横に車を押さるゝとも高の知れたる事これは末なり、まづ差當つての大敵は酒井雅樂殿、これに對する原田甲斐さほど怖るべき男にも御坐らねど、何を申さうにも多年江戸一切の奉行役として内外萬事を一人に心得たるが聊かの面倒、ところで誰彼といはむよりは、この小十郎の此度二度目の出府役にせられたい、不肖ながら随分と立働いて面の御覽に入れむ覺悟かねての希望、申さば御家の大事、あはれ先代の家格に免じて」
いひつゝ満座を草の野原と見渡す末より柳田監物とて三千石取の男、膝を進めて聲を張り上げながら、

「片倉殿、思召の段は御苦勞千萬なれど、その原田甲斐は正しく貴方が内室の兄、されば妹婿の貴方では何とやら」

きくや否や小十郎じろりと見遣りて、その面上を扇子に指さしながら、
「あれに武門の心得なきもの一人、先君の遺し給ひし武者堂の評議席には恐れあり、誰か手
近の御人、それ掻い擱んで抛け退けさッしやい」

仙臺城中の武者堂に百二十七人の諸士が席を聯ねての一大評議なれば、いづれ半日一日の事
には濟むまじく、さては其夜を徹して曉にも及ぶべきかと思ひの外、片倉小十郎が自から進
んで出府せむとの一言、しかも柳田監物を吐りつけたる最後の勢ひに、満座たちまち臍を固
め心を安んじつと、いざさらば白石殿に萬事の重荷をあづけて見送らむとぞ定まりぬ、
小十郎さらに席を進み出でつと、一座を見渡して容を改めながら、

「かく詰め合はれし歴々の面々を俵置いて、不肖の小十郎と一人、おのれ人がましき體に出
府せむと申し出づる次第、定めて身の分際を辨へぬ嗚呼の奴とや思召の程もあらむが、およ
そ斯る義には一の手二の手三の手と、奥ふかく一皮づつに取上げたる人品を差出すべきが
大家の作法、さるを慌しう物音に恐れて駈け出で、また前後を亂し賢愚を倒にして事に當ら
ば、忽ち敵に數を見透さるよのみか、たゞ一度の仕損ぜし曉は更に二の手の效能も薄き道
理、申さば小十郎まづ戦場の斥候で御坐るわ、はよよとよと、や戰場といへば、さる寛永年
中肥前の島原天草に立籠りし僅の百姓一揆すら、必死の覺悟を極めて心を一にせし勢ひは、
天下の名代を引受けて物の數ともせず、九州諸侯の大軍を敵として少しも驚かず、夜うち
朝がけ思ふがまよの振舞に、さしもの寄手さんく敗北の體、しかも年を越えての籠城堅
固なりしを思へば、およそ戦ひといふもの、唯これ人心一致の働きにあるのみと存する、さ
れば不吉を急ぐ義には御坐らねど、油斷大敵、徳川家の客大名に對する奥の手の第一義と

して、近くは諸家に例もありしこと、もしや萬々一、瀬踏みに先だつ小十郎が江戸の水に溺れ死せしとの音便あらば、その時こそ面々もはや當家の浮沈と心得て、よしや將軍の命なりとも、また館様の仰せなりとも、この城みだりに開け渡すなとの義は弓矢八幡かけて無用の業、その後の働きぶりは方々の方寸にあるべし」

いひつと満坐を見渡せば、宛がら水を打ちたる如き體に、小十郎おもはず閉ぢし兩眼を見開いて、

「四海波しづかに斯く太平の御代には、以上の次第、萬々一にもあるまじき筈ながら、小十郎の不在中は只管ら方々の御苦勞たのみ入る、それも唯、分家殿が押し出せし横車に大老が手を貸されしのみ義なれば、さほどの大事でもあるまじ、小十郎まかり出でて忽ち取靜むべき覺悟は千萬、また原田甲斐を怖れて其心底を疑はるよばかりの義なれば、また一段と

易き業、兎も角も小十郎は明日このまゝ當城より出立いたさうわ、白石の居城は面々のうち誰様か御一人に預け參らす」

仙臺城中の武者堂に集りし百二十七人の中より、片倉小十郎みづから進んで出府の大役を受け、吉沼三右衛門川畑丹平と唯二人の家來を召連れたるのみ、その餘の同勢は悉く白石の居城に追ひ歸しつと、分別も臆魂も打揃うたる主從三人、時もうつさず其まゝ仙臺より旅立ちぬ、

かねての用意、小十郎は富士形の葦笠まぶかに一切小紋の旅裝束、大小は高木貞宗來國俊、いづれも道具を外して目立たぬ赤銅仕立の替鞆に箆めつと正平革の腰巾著、二本がけの奥州草鞋、從ふ吉沼と川畑の二人、これも柄袋かけたる傳來の業物を横へて、一文字笠に合せ染の

旅装束、固より大事を控へし主従三人しのびの道中なれば、下郎も連れず奴も従へず、仙城諸士の見送りをも押し止め、夕陽かたぶく城の櫓の宿鴉に引き代へて幸ひ今夜は月を友にと立出でぬ、

三萬石の城持ながら他家他門に異なりし家風の小十郎、産聲あけしより心は富めども身には貧しき十八人の家々をめくり育ちて、草鞋ふみしむれば脛腰達者の下郎も同然、吉沼川畑の二人は固より片倉家の武士手本と唄はると男、されば主従三人が夜もすがら月を踏んで然のみ急がねども、はや其の曉には白石の居城を打通りぬ、

わが居城なれど君家の大事に旅立つ空ごと、三人いづれも唯みあけたるのみ、しかも市街の裏道を傳うて搦手口の松原に差掛れば、道の邊の朝露に一挺の女乗物、侍分も従へず侍婢風情も見えず、下郎わづかに六七人その前後を圍うて蹲りつゝ待ち受けぬ、

吉沼三右衛門はやそれと察して一人駆け抜けつゝ、駕脇に立寄つて雙手を下し聲しづかに、

「よくこそ、只今が御通行、三右衛門で御坐りまする」

駕の中より現はれしは妻女の澤、さらぬも仙城隨一の美人が武家の奥づくりを凝らして朝ほらけの空に冴え渡る目色いよく晴れて氣高く一入さらに艶なり、小十郎ちかづいて葦笠を傾けながら、

「定めて昨日歸せし者どもより聞かれたらうわ、かく俄の旅で前夜よもすがらの月を踏んで

ぢや、さて此度の出府については一切の書通無用、和女は唯その身を大切に居やれ、

はよよとよめでたう歸國の砌、何をが江戸の土産にせうぞ望みの品は」

「たと御無事を祈り上げます外は、また御不在中の事は不束ながら」

「むとさらばぞ、奥育ちの身に朝露は毒ぢや、さよ早う」

片倉主従三人しのびの道中を急いで、仙臺を立出でしより七日目の朝、いざ今日ぞ大事を抱へし江戸の入口、千住の大橋まで来かよりて立場の茶屋に憩へば、日取も時刻も何として知りけむ、はやことに汐留屋敷より迎ひのために待ち合せたる二人の使者、濱田玄蕃、渡邊金兵衛、いづれも繼上下に用意の駕を吊らせて立出でぬ、

「これは白石殿、相變らせもなう御健勝の段、まづ道中御無事の段、あはせて御祝儀を申し上げまする、さて如何やうの御急用あつてか、御案内もなく軽々しい俄の御出府、兎も角も拙者共は奉行役原田甲斐が名代として御迎へのため、いざ召しませ」

兩人言葉を揃へて吊らせし駕を差寄せれば、小十郎慇懃の會釋を返しつと、

「これは打揃うて丁寧なる御出迎へ、近來いたみ入りまするぢや、なれども小十郎この度の

出府は別段さしたる用事でもなく、固より召されたる御用の筋でもなく、年來たゞ白石の草叢にばかり罷り在つて、何とやら退屈のあまり、久しぶりにて田舎者の江戸見物、はよはよと主従三人が草鞋かけの心まかせに氣散じの道中かくの體ぢや、乗物などは勿體なし無用の大儀、たゞ御挨拶だけは忝う受けますると傳言せられたい、ついでには宿の義も市中の旅籠屋にいたせば、これまた無用の御馳走ひらく、但し折を見て、館様の御機嫌を伺ふためには參上仕る間、その節の取持だけは萬事よろしう頼みまゐらす、はよと二三年の山里に引籠りし身は、晴れがましき席上に迷うて心細う存するぢや、それに引代へ偕も兩人の衆など、しばらく見ぬ間に別けて氣高うなられたわ、なう吉沼川畑、其方などとは人品おのづから天地の相違、はよと士は居を選び人は處に依るものぢや」

軒下の床几に腰うちかけて汲み出す澁茶を手に取りながら、片頬に笑を含んで飽まで悠々た

る小十郎の體に、濱田渡邊の兩人なんとやら引絞つたる空箭を射し心地、さりとして今更ら空駕を吊らせて歸りもならず、其身そのまゝ打乗つて歸りもならねば、いよく懲勲を極めて額越の目色、

「立歸つて仰せの段々しかと奉行に申し聞けまする、なれども折角これまで吊らせし乗物、出迎への我等に免じて、せめて御宿まで」

「さればの、吉沼川畑いかど致さう、同じうは其方兩人この空駕に添うて濱田渡邊の兩所を送り申せ、はよよよよ互に五分々々の禮義ぢや」

たど驚いて大事々々と叫ぶの外は何の仕出來す工夫もなき八人の元老が、打揃うて血眼に押し寄せ來らむとせしを三寸の舌頭に追ひ歸したる二度目の出府役として、正に來るべきもの

は白石の片倉小十郎ござんなれ、善きにせよ惡しきにせよ、敵に取つて面白く、味方に取つては金城鐵壁、いづれにしても打てば響く確の手應あるは奥州五十四郡のうち斯男の外になしと、指折り數へて其日を待ち受けたりし原田甲斐、固より忍びの道中なれば逆も乗るまじと知りながら、わざと渡邊濱田の兩人に乗物つらせて千住の立場まで出迎ふれば、案に違はぬ言葉の端々、されど召連れし吉沼川畑の兩人を添へて此方まで返禮の挨拶させしは流石の男、かくなうては甲斐が敵手に物足らぬ心地ぞすると、この大膽なる不敵人おもはず笑を含んで何事か獨り首肯きぬ、

今日白石の片倉小十郎出府、されど御用でもなくまた別段さしたる私用でもなく、かつは聊か道中の疲勞もあり、就いては暫時御免を蒙つて町宿を取りし間、御前の執達よろしく頼み入る、あはせて此段御届け仕ると、傳馬町の仙臺者が定宿より改めて江戸奉行原田甲斐が許

まで吉沼川畑の兩人使者として罷り越しぬ、
 片倉の使者が立歸るや否や、江戸詰重役の一行より音物を添へての使者を送り、續いてまた奉行役一人の手前より挨拶の品々、程もあらせす原田甲斐みづから立出でて傳馬町の定宿を訪へば、さもあらむとて彼方も兼て設けの奥の一室に迎へつゝ世に唄はれたる奥州の雙龍ここに三年ぶりの對面所、しかも五十四郡の盛衰興廢は物の七分まで此一席に定まりぬ、まづ江戸と國元と互の役義より取交はす懇懃も濟み、絶えて久しき互の身の挨拶も濟み、さて後に改めて見合ふたる目と目の間には、原田甲斐なんとぞいふ、片倉小十郎いかに打ち出でむかと、暫しの無言を割つて運び出づる茶菓は吉沼、續いて運び出づる酒肴は川畑の役、この外には一切さらに宿の男女を遠ざけて、いつしか盃の數と共に互の言葉おのづから通ふ頃は、兩人の給仕役もまた退いて唯こよに二人、

「甲斐殿、此頃は江戸表に何か騒がしき次第あるよし、勿論、人傳には聞き及んだ義も御坐れど、何を申すも舌と心と釣合はぬ不覺の面々が風聞、かつは奉行役の貴方より更に何の報知もない内の事といひ、かたぐ小十郎などは別段さして聞く耳も持たぬが、儲また煙の立つところには火のあるべき筈とやら、もし彼等が立騒ぐほどの義でなくとも、はよはよよ其事に似寄りの面倒でも御坐るかな、幸ひ貴方と我との間にさへ仔細なくば、江戸と國元とは磐石の基礎同然、あはれ腹藏なく語られたい、この砌はわけて頻に貴方の名が仙臺中に騒がしきまよ、妻の澤なども、いかう心配いたしての、はよよよよ時に今年の秋は御尊父の大内藏殿の十三回忌と心得たが、左様で御坐るかな、我等夫婦も繋がる縁の端ぢや、ともく打揃うて伊達家の忠勇無二と言はれし墓前に參籠致したい、其節は貴方も必ず歸國めさるよであらう、あゝ御尊父が今日なほ在られても七十には越されぬ年輩、

江戸一切の奉行役たる貴方を家の子に持ち、また不肖ながら白石の小十郎を婿に持ち、内外あはせての満足いかに喜ばるゝであらうぞ、其身の老も忘れて、なう甲斐殿」
いひつゝ原田の面上じろりと見遣れば、さすがの男おもはず垂れし頭を、やがて振り上ぐる
兩眼に涙うるめり、

「父が事を申されては、かへらぬ浮世の常と知りながら、俵いつまでも子としては諦めのつかぬもの、たゞ涙で御坐るわ、なれど其事は互に一身の私事、まづ差當つて御耳に觸れし江戸表の立騒ぐ仔細、今この原田甲斐より片倉小十郎殿に申し入れようまよ、しかと分別の御挨拶を承りたい、御邊ならでは内實本心うち明けて談合すべき人品もなしと、心まちに待ち受け申した幸ひの折柄」
言葉もろとも膝を進めぬ、

原田甲斐が片倉小十郎の宿を訪れて、何とやら冷き始めの無言にも似ず、果は其日の夜更くるまで人しれず語りし一室のうち、互の心と言葉の裏表いかに綾どりけむ、さては眞實うちあけて目と目の涙を合せしか、手を取り合つて深くも頼み頼まれしか、こゝに仙城の雙龍しばらく其夜の談合を包んで袂を分ちぬ、

人しれず膝を組んで甲斐と打語りし其夜の明くるや否や、片倉小十郎は例の兩人を召連れたるまよ麻布廣尾の伊達兵部が屋敷を訪れぬ、

本家より何の挨拶もなく、甲斐より一應の報知もなければ、取次の者よりも先づ主人の兵部おどろいて眉を顰めつゝ、宛ら不意の大敵に襲はれし心地もしつゝ、また思はぬ百萬の味方を得し心地もしつゝ、喜憂こもく胸に迫りて何とやら座にも得堪へぬ風情ながら、兎も角も

案内せよとぞ慇懃の體に待遇しぬ、
 小十郎そのまゝ席に入りて更に恭しう、まづ主人の恙なきを祝し、おのれが時ならぬ身勝手の出府を謝し、續いて時候の挨拶、また國元の昔に變らぬ山水の景などを繰返して、さらさらと何の仔細けもなく滑かに語り出づるの外は、一言たえて事むづかしき儀にも渡らず、始終たゞ満面に笑を含んで浮世なみくの沙汰のみ、さりとして此方より言葉かはさずとも平然として動かぬ體に、疵もつ足の笹原といふ兵部が心中いよく底氣味わるく、幾度か坊主を呼んで茶を通はせ、しばく小姓を遠ざけて何事か言ひ出づるかと待てども、小十郎なほ悠々として自己が居室に物を案する如き風情、さても奇怪、あはれ不思議、平生は疾風電霆と聞えたる男なるにと、主人の兵部たえかねて膝を進めつよ、
 「この度の出府、時ならぬ身勝手の保養かたぐとは申さるゝが、眞實さうであるまい、じ

たい何の用事あつてぢや」

「いや先刻も念を入れて申し上げし如く、全く無用の徒ら旅、さればこそ汐留の御屋敷にも逗留仕らず、主従わづかに三人が傳馬町の町宿に罷り居りまする」

「むよ左様か、それは定めて氣散じの事だがな、ついでには旅の空もし不自由の儀もあらば、仔細なく申し越されい、本家へは却つて大儀であらうに」

「有難の御意、なれど此度は浪人者同様の氣樂旅に御坐れば、別段さして物の不自由も」
 「なるほど、さらば折々、心置なう來られて酒にでも致さうわ」

「小十郎、近來たえて御酒くださりませぬ、たゞ同じ賜はるならば、いさゝか差當つて御願ひ申し上げたき儀か」

「およ、それは聞かずとも、易い業ぢや、いかなる儀であるの」

「願はくば御口添を以て、御大老酒井雅樂頭様に内分の拜調を仰せ付けられたく、あはれ何卒この御取持を」

「や、それは一入と易い儀ぢや、知らるゝ通り縁者のみの事でもなう、近來わけて酒井家とは懇親の間柄、や、幸ひのこと、仙城の名物、雅樂殿も定めて満足に逢はるゝでがな、さて面會の上、何事か挨拶の用事でもあらるゝかな」

「その用事は拜調仰せ付けられたる上、そと申し上ぐべき筈ながら、さては御口添に對しての恐れ、さればこゝにて一應かねての御耳まで、じたい餘の儀でもなし、不肖ながら仙臺伊達家の片倉小十郎が聊か思ふ仔細あつて分家の兵部殿が子息の嫁女、取も直さず酒井家の息女を不縁として里方へ返し參らせむ一義で御坐る、じたい雅樂頭殿の息女は伊達の分家と家風が合ひ申さぬわ」

今まで睡りし猛虎一聲、主人の兵部が咽喉笛を覗ひぬ、

御口添を以て大老に内々の御意を得たし、不肖ながら仙臺伊達家の片倉小十郎ぢきく申し入れて、家風に合はぬ分家の嫁を返し參らせむと吐いたる一言に、さすがの兵部あつと呆れて暫し其顔を見詰むれば、さても大膽不敵さは滿身これ膽といはるゝ甲斐にも増しての平然たる體、一陣の春風おもむろに面を吹いたる風情もなし、

敵に取っては怖ろしく味方を取っては百萬の勢とも思ふ原田甲斐に、年月さまぐの品を盡し工夫を凝らせども猶いまだ動かぬうちに、今また甲斐と其名を並び唄はれて、加之も兄弟同然の因縁ある白石の小十郎が俄の出府、南無三寶、大事の上の大事なりけりと、兵部そのまゝ奥に走せ入つて片倉の立去るや否、直ちに乗物つらせて下馬先の酒井家を訪れぬ、

をりしも今日は徒然のまよなる酒井雅樂頭、麻布廣尾の老人まゐられたりと聞いて、案内もなきに押し掛けての入來は何事か至急の用でがな、彌右衛門いづれに居る、召し出して萬事介添いたせ、給仕は坊主一人、それ兵部を呼び入れよと命じながら、中御殿と稱へて奥庭ふかく構へたる一室に出でて雅樂頭は脇息引寄せて打寛いだる風情、兵部は尊を半まで送り出でて慇懃の中に何とやら急いたる顔色、出頭の石田彌右衛門は繼上下を著して差控へつゝ、障子鞘間の釜脇には子飼より奉公無二の坊主一人あるのみ、

「餘事は措置き、慌しい俄の入來は、何事であるな」

「まづ差當つて申し上げます、此度、國元より片倉小十郎が出府の儀につき」

「むゝ白石の片倉が來たとか、面白い、彼も音に聞ゆる名物ぢや、それに就いてとは小十郎なんとか致したかな」

「まことに言語道斷の振舞、おのれ身勝手の不意に出府いたしながら、この兵部に對うての舌三昧、只今これにて申し上げるも憚り多く、恐れ入るばかりの直言を吐いたる不屈至極の奴、またその面魂の不敵さは御存じの甲斐にも増して心憎き奴」

「はよよよといかう不満の體ぢやの、じたい片倉め、いかなる不屈の直言を吐きをツたかまづそれを語られい」

「はッ、今更ら申し上げずとも義ながら、この兵部づれが世に人がましよういはるよも、全くは、愚息市正に下しおかるゝ御縁邊あればこそ、身の面目、家の名譽、第一が本家の花とも喜び申すべき筈を、かの小十郎奴なんとか狂ひしやらむ、近日みづから御前に推参いたして家風に合はざる次第を申し上げたる後、本家の式を以て分家の嫁を里方に返し参らせむとの一言、この兵部が身としては座も立たせず其場に討ち果さむかとまでに存せしが、

時も時なり折も折、一應まづ御耳に入れて」

いひつゝ差俯く兵部が横顔を、雅樂頭しげく見遣りて小首を傾けしが、やがて例の活氣の空を仰いで高笑ひ、

「はよよと遣りをるわく、さすがに小十郎、いや不敵にも吐したるかな、面白い奴、男ぢや、男ぢや、無用の太刀討に暇を潰さむより飛び込み來つて咽喉笛を掻い搦まむとの一計、あゝ仙臺には人があるわ、なう彌右衛門、其方なんと思ふぞ」

きくより彌右衛門すよみ出でて笑を含みながら、

「御前の思召そのまよ、これは片倉が策略と心得まする、いやはや甲斐に劣らぬ鋭い男、まづ當家と兵部殿との間を隙間もあらせす一揉みに揉み抜いて、おのれは悠々たる體に高見の見物、もしこの策略仕損ずれば、わざと當家に自己一人が飽まで憎まれての後、二の矢をつ

がむとの心中、されど此方に取つては、また彼奴の出府を幸ひ甲斐と小十郎を手鞠として互に隔心さすべき反間苦肉の一計、じたい甲斐ほどの奴が癖として、何事にも物足らぬ時は却つて腸の静なるが故に動かし難けれど、もしこれに對して肩を並ぶべき相手の出で來る時は、敵にせよ味方にせよ、いつしか心中の静ならぬ處に附け入らば忽ち動かし易きものも心得まする、いはゆる事に當つて兩雄の立たざる道理、願はくば石田彌右衛門を以て相當の御役目仰せ付けられたく、あはれ斯る折柄の一活動は却つて面白く存じますれば」

雅樂頭おもはず膝を打つて又もや高笑ひ、

「彌右衛門、萬事は其方に任すぞ、やれく、もし遣り損うた曉は雅樂頭があるぞよ、はよよはよよ兵部殿、何事も彌右衛門に相談せらるゝが宜い、とかく御身は正直ぢや、はよよはよよ」

人としては更に怖るゝほどの面魂ならねど、その身分といひ、今この時といひ、とかく事の基因は分家の兵部一人、さらば先づ描き出す刷毛ついでの墨色を試みむがために、いさゝか兵部の横面を搔い撫でて、仙臺より白石の片倉小十郎出府のよしを餘所ながら大老酒井家の耳まで入れ置かむものと、思ひもよらぬ縁邊断切の一言に分家の胸を驚かして其まゝ傳馬町の宿に立歸れば、原田甲斐より一封の書狀到來、

何事ぞと披き見れば、言文ともに慇懃を極めて、今更ならねど藩中に聞ゆる名筆わけて麗はしく、不肖の甲斐みだりに過分の重職を帯びて日夜たゞ公私に追はるゝの外は、結句なんの御爲にもならざる義のみに忙はしく、自然いつしか心身を勞らして近來は我ながら苦しき折もあれば、かねてより淺草駒形の片邊りに人の訪ひ來ぬ休息所を設け、御用の暇には此家にて

保養いたし居り候まよ、もし近きわたりに御通行の砌もあらば御立寄り下されたく、茅屋なれど大川の流れに臨んで青葉かくれの一構へ、わけて今夜は幸ひ十五夜の満月、わざと燈火うち消しての物語、また旅中の御一興ともなり俵は浮世の外御心地もいたすべきか、只管ら御入來を待つとの文意なりける、

小十郎しばし書狀を見詰めて何をか思案の體なりしが、やがて其まゝ町駕を傭うて宿を立出でつゝ駒形の甲斐が隠宅を訪れぬ、

をりしも甲斐は例の棧橋に立出でて、裏河岸の夕暮に釣を垂れしが、傳馬町の宿より訪ひ來し客人と聞くや否、事に當らば大海の鯨鯢を手捕にすべきほどの男にも似ず、小指に等しき雜魚を釣上げたる満面の笑に其まゝの竿を携へて中庭の柴折戸より迎ふれば、小十郎おもはず高笑ひして、英雄の閑日月まのあたり見る心地といふに、甲斐は手を打振つて、いや〜

これは傾城の憂きを忘るゝ三ヶ日に同じと笑ひぬ、
 主客相伴うて樓欄に倚りながら、月の出づるには程もありなむ、書面の赴さらば浮世の外
 といふ約束の前なり、いざ浮世の中央を聊か語らむとて、小十郎まづ分家の兵部を驚かした
 る仔細かくと告ぐれば、甲斐おもはず膝を叩いて、流石は白石殿、分家殿に一泡ふかせて酒
 井家へ出府の届振としては、面白しく、いしくも遣られたり、なれども大老が腰巾著に石
 田彌右衛門と申すもの、此奴なかくの男、御油斷大敵とぞ言ひぬ、

世は男といへど落つれば底の泥水、女なればこそ浮べば玉の輿、まして賤しき愚鈍の身にも
 數ある武家の華ともいはるゝ人に册いて、辛き浮世の風にも當らず鹽も舐めずに、四季をり
 をりの月花を心の友に樂む今の境涯、おもへば勿體なし、あはれ足らぬ勝なる我身の何をも

て深き情に報いむとは、露が平生の心なりける、

大名中の國持大名、その仙臺の奉行役として江戸一切の内外を一人に取扱ひつゝ、汐留屋敷
 の原田甲斐といへば世にも人にも許されて、聞けば物の手本にまで引かるゝほどの御人、さ
 れば日夜の御苦勞いかなるべき、朝夕の御勤務いかに忙しかるべき、人しれぬ身の御勞れも
 あるべし、餘所には洩らし給はぬ心の御苦しさもあるべし、さるをその中より輕々しう此家ま
 で歩みを運び給うて、おろかの我身を慰めむとての御顔、はや一年に餘れども戯れの御叱り
 にも逢はず、さりとて我身の色艶もし假初の心地あしき時には、もの憂き眉を擧めて醫藥を
 すすめ給ふ情の數々、まして生みの父なり義理の父なり、めぐりくつて落ち合ふ父子三人ふし
 ぎの御恩おもへば、わかき女の身一つ何として御奉公の端にぞならむ、祈るは神様佛様、こ
 の露あはれと思召して一念まもらせ給へ、君のためには身も心も我物ならぬ女一人、

さるを此ほどは何としてやら平生の優しき笑顔にも似給はで、をりく柱に身を寄せて膝拍子かるう節おもしろの御謠も聞き参らせず、また或時我身をさへ追ひ退けて獨り夜深の燈下に物したよめ給ふ時の沈みがち、かつは心地きよけに酒ひとつの御言葉にも今までの戯れとは違うて、たゞ我身の行末を案じ給ふ訝しさ、餘所ながらの人傳に聞けば、山くづれ海くつがへるとも動き給はぬ人品といふほどの御心に、さても氣遣ひや此頃は、わけて前夜きませし客人は、お國元の重き方とぞ聞く、しかも夜更け人定まりて後、膝と膝とを衝き合せての御私語といひ、まだ東天の明けやらぬ空を出て行く客人の風情、送り出せし君が御心地わるしとて俄に臥し給へる氣配、そと差覗けば兩眼見開いて怖ろしけに控へ給ひし嚴めしさ、あ何とせう、

原田甲斐は辨之助の昔より他家他門にまで聞えたる奥州の麒麟兒、まして二十七歳の曉は既に數ある元老歴々の中より一粒選に抜き出されつと、十年の春秋こよに江戸一切の奉行役として内外公私の萬端を一身に引受け、しかも名實ともに日を遡うていと世に高ければ、國元の諸士おのづから目を張り耳を敬て、片田舎の律義一片より花の大江戸を思へば如何ほどの華奢全盛を盡すかと、葦の節穴より空を仰ぐの心いつしか嫉妬偏執となりて、あはれさらぬも古今に稀なる大膽の不敵人、多年あのみと捨て置いては竟に君家の御爲なるまじとて、物に柄を差し事に翼を添へて姦しき折も折なり、分家の横車と大老の權威に狼狽へ騒ぎし脱走組の徒輩が、走せ歸つて前後を失うたる注進の體に、南無三寶すはや甲斐奴が本音を吐いたりとぞ驚きぬ、しかも兵部が横車より大老が後楯より一入さらに甲斐を怖れて、宛から獅子身中の蟲をもて譬に引きぬ、

こよにまた片倉小十郎は仙臺隨一の名家、しかも幼少の頃より甲斐と並び唄はれて音に聞えたる逸物、白石三萬石の世に立ちてよりは猶更ら奥州五十四郡の國元支配役として、四十八館の上席をも許されたるほどの男なれば、いざ大事あらむ時は斯人をこそ先達と頼みしに、原田甲斐詮議のために押し上らむとせし九人の中より一人たゞ引返せし以來は、遠謀秘策ふかき仔細ありとも知らざる眼前の儕輩しきりに眉を顰めて、何とやらむ快からぬ耳と耳とに傳へつよ、いつしか疑心に暗鬼を生ずる折しも、八人の元老が途中より立戻りし時おのれ一人わざと忍んで上りしかば、いよく驚き、ますく怪しみながら、さればこそ甲斐が妹婿、兄弟同然の彼奴等二人が揃ひも揃ひし不敵の根性骨を押し据ゑて手を取らば大事の上の大事出来、分家の野心といひ大老酒井家の後楯といひ、もしや彼等二人が事を起さむための囮にはあらざるかとまでに震ひ戦きぬ、

いつれの世も盲目千人、ひがめる心に見えぬ目をもて邪に推量らるよほど辛きものはなし、聞けば此ごろ國元より我等二人の身持詮議として、三人五人十人二十人の秘し目附が竊に出府しつよ日夜に飛耳長目を走せて何事かを探るとやらむ、我等二人いかに探られて一朝おもはぬ災禍にかゝるとも、古今ある慣ひの事そは身の不幸ともせむ、たゞ一身の不幸として我等二人もろとも失せなば仙臺伊達家の行末を何とせむ、あはれ怖ろしき大敵すでに家門を窺うて眼前にありとも知らず現在おのれ等が頭領に斧を振って打割らむとする白痴どもの情なや、いはよ内外一時に敵を受けたり、いざや斯らむ時に語るべきものは君と我のみ、最後の計さらば今宵に極めむとて、甲斐小十郎たゞ二人、小舟を浮べて品川の沖に漕ぎ出でぬ、月は高く冴えたり浪は靜に眠れり、筈を拂ひ燈火を打消して、兩雄たがひに手を取り膝を組み、何をか語る、

月は高く夜は更け渡りて、大川口にかよれる親船の櫓も睡りつと艫に従ふ小舟の浪に揺らるゝ泣音もなく、漕ぎ出でて見渡せば水や空なる房總の際までも明鏡に似たる品川沖の水心に一葉の舟を浮べて、篙を拂ひ燈火うち消し舳の棹に繋ぎながら手を取り膝を交へて語るは誰ぞ、片倉小十郎、原田甲斐、それより三四反の此方にまた一葉、これには片倉の手の吉沼川畑と原田が手の氏家と菅野あはせて四人、外に船頭二人、小十郎おもむろに掛けたる舳の片舷を放ちて、誰聞くべきものもなき海上ながら流石に聲を潜め容を改めつと、

「先刻より段々の委細も、つまるところは足下と我との覺悟次第が盛衰興廢の分るゝ大事ぢや、なう甲斐殿、外には分家の野心といひ權威無上の酒井家が後楯といひ、また内には前後の度を失うて唯まのあたりに立騒ぐ藩中の諸士、わけてこの騒動を取静むべき本國の元

老どもが眞先に聲を上げて江戸一切の奉行役たる足下を憎み國元の總支配たる我を疑ふ始末、家國ごとく罪なくして内外一時の大敵とは正に今、そもく何として取扱はるゝ御工夫ぞ、浪は静に睡りて物いはず月は高く冴のれど耳なしぢや、はよよ今更ながら本心うちあけての最後を聞き申したい、武士冥利、佛神かけて他言は仕らぬ、よしや天と地と逆様の怪事なりとも」

いひつと空てる月に目を敬て見話むれば、甲斐おもむろに閉ぢたる兩眼うち開いて、白く照らされたる額越に夜ふけし大空の露や受けけむ、うまれついたる男振りよく凜々しく冴え渡りて、やをら舟底の動くばかりに力膝を進めぬ、

「白石殿、我とても今更ら改まりし工夫は御坐らぬが、さて分家の後楯を防ぐには時に取つての方便、まづこの甲斐が飽まで不敵の本性に見せかけて只管ら天下取の謀反を勤むるより

外はなし、酒井家に天下取の大事を勤むる以上は伊達家の事な第二の小事、はよよと遣り損うてからが奥州信夫の館の八千五百石と下馬將軍たる天下の大老と組んで落つるにさのみの損はなし、ついでには藩中の取扱ひ、わけて本國の儀これは偏に御身を煩はし參らする、さるにても分家の野心といひ酒井家の後楯といひ、事もし叶はざる曉は、憎まるる我も疑がはるゝ御身も何の隔心あるべき、凡そ伊達家の男たるもの一つとなつて仙城に立籠れば藩中の騷動たちどころに治まるのみか、まづ分家殿を血祭りに酒井家はおろかの事、將軍の出馬を待ちかけての一活動するまでぢや、但しそれほどまでに及ばずば御身と我と互に敵味方となり公儀に對うて訴訟沙汰とするもまた一策、いづれか死して一方に生き残れば伊達家安泰、かつは分家も酒井も其間に業は成るまいぢや、甲斐の心體かくの如し」

小十郎おもはず涙を浮べて甲斐の手を取りながら、

「家を亡し身を殺し後の世までも唄はると苦節孤忠の本心、まこと引受けて賜はるや、もしや事むづかしからむ曉には」

「御念に及ばず、とかく斯る難儀の場合には一時のがれの彌縫普請かたく無用、いはど一たび覆して新たに建て直すが工夫の第一、戰國の世にも生れ逢はいで何の仕出來す事もなき太平の原田甲斐、いたづらに死するも興が薄いちや、幸ひ面白き御用の筋に立つほどの義なれば何日なりとも、はよよよよなう白石殿」

月は高く夜は更けて浪も睡れる品川沖の水心に、人しれぬ一葉の舟を浮べて曉の潮までも語り明せし仔細、江戸と本國の支配同志、かつは兄弟に等しき縁類といひ、固より互の腸うちあけて心の雫も残さざる筈ながら、私の小事ならぬ君家の一大事と、おのゝ家に歸

りて後またもや首を傾けての一思案、天晴あれほどの言葉はあれど甲斐が本心いかに、あれほどの眞實を現はせど片倉が心體いかにと、

小十郎は傳馬町の宿に引籠りて、たゞ獨り自から抹茶の手前に心氣を澄しつゝ、町家なれども流石に諸侯の自身を客とするほどの結構、時しも秋草みだるゝ露けき庭の面に對うての一室、書縁の柱に背を凭せて前夜の甲斐が風情おもへば、また眼前に見る心地して、何とやら一節とけかぬる彼奴が面魂の怖ろしさ、

なるほど、分家の野心は俵置き、逆も叫はぬ天下の目代たる權威無上の大老を敵に受けて空しく君家の滅亡を待つよりは、まづ第一に藩中の人心を引締めむ爲の證據かたぐひ一つとなり仙城に立籠らむといふ彼奴が言葉も時に取つての男らしき一言、されどまた其儀に及ばずば我と足下と殊更に隙を生じて公儀への訴訟沙汰とし、一方いづれか生き残つて君家を保たむ、

加之も分家とて酒井とて天下の評定所には流石に業を施す隙間もあるまじといふ彼奴が第二の心體また一策、以上の二策ともに臨機の苦忠ながら、たゞことに怖るべく疑はしきは彼奴が言葉の端に尋常ならぬ一節ありけり、あくまで酒井家に天下取の謀反を勸めて敵の腸を抉れば伊達家の小事その間に顧みる事なるまじとは、安きに似て安からぬ一言、手もなき策略に似て風雨いづれか定まらぬ怪しの雲脚、しかも彼奴が萬人に勝れて生れし古今ふしぎの大膽不敵、たゞ君家のために敵と組んで自己が一身を捨つる方更ならば何の仔細なけれど、もしやこれぞ彼奴が本心ならば奇怪至極、辨之助の昔より今に至るまで何とやら太平無事の世を怨み貌なる彼奴が骨法といひ、わづか奥州信夫の八千五百石に運命を繋いで徒に朽ち果てむ無念さとは、をりく、彼奴が平生の言葉にも洩るとほどの男、されば一個の大名たる伊達家のためには不忠の名を惜しんで自然あくまで苦節にも甘んずべきながら、もしや眞實に天下取の

ためとならば後の世に反逆の名を唄はるとも更に悔いざる甲斐が一念たしかに見えたり、危しく、あはれ酒井家が最後の一言こそ彼奴がために忠と不忠の大切所、願はくは彼をして苦節孤忠に死せしめむ、君の御ため諸士一同のためは仙城一人の原田甲斐がため、

大老の腰巾著たる酒井家の出頭、石田彌右衛門が奥庭の敷奇を極めし茶室のうちに、膝を組んだる客は原田甲斐、これぞ互に人しれぬ四度目の物語なれば、いつしか言葉も馴染んで慙の體も薄らけど、なんとやら心の一物いよく隔ちて鎬を削り合ひぬ、

「さて甲斐殿、拙者より参上すべき筈のところ、わざと今日こゝへ御呼び申し上げたは、つまり例の事、嗚呼かゝるむづかしい義は、お互に一時も早く取退けて月とか花とか浮世の外（外）の風流を酒の上に致したい事ぢや、なう甲斐殿、なまなか人に唄はるゝ身は兎角に苦し

いばかりの取得、いはど前世よりの約束でがな、はよよよよ時に御國元の片倉殿がしめさせられたよし」

「されば、小十郎こと、さしたる用事もないに俄の出府、我等も不審に存じて聞き合せたるところ、あまり草深い田舎ばかりに引籠つては氣が滅入る心地かたぐ身の保養をかねて江戸見物同然とは、相も變らぬ頓狂男、はよよよよについては小十郎出府の義、我等藩中さへ悉くは存せぬに、如何して貴方が」

「いや外でも御坐らぬ、過日、分家の兵部殿が参られて、片倉殿がいはれしとやら、本家の格式を以て家風に合はぬ分家の嫁、取も直さず當酒井家の息女を不縁にいたさむと押し詰められし段々」

「や、それは全くの儀で御坐るかな」

「さては甲斐殿、御存じないとか」

「さらに存じ申さぬ、されど、それほどの大事、まして江戸の儀なれば、この甲斐に一應の内談あるべし。管を、しので出府の小十郎おのれ一人が、はて不思議、三之助の昔より一旦かうと吐き出したる事は生命にかけても退かぬ氣の男が、さても不思議ぢや、南無三寶すりやこの甲斐を押し退けて國元の徒輩すでに一體となりしものか、奇怪々々」

「國元の徒輩一體とは」

「もはや斯くなりし曉、何事も包まず申し上ぐれば、かねてより御當家が手前分家の兵部を扶けて御申込の一儀、はやくも本國に聞えて日夜の騒動なかくの大事、さるを甲斐一人江戸に罷り在ッて取鎖めの工夫さんぐいたせしがため、その甲斐を兵部方、恐れながら酒井家の御用に取込まれしものと心得、近來しきりに疑心を起すとの風聞、さては以上の

段々一時に事實となつて小十郎出府せしものと存する、分家の子息市正に下さるゝ當家の御息女を返し參らせむといひしは、正しく白刃を磨ぎし手切の一言、もはや仙臺には籠城合戦の用意いたせしと存するぢや、石田殿」

いひつゝ膝を進めて彌右衛門の面體じろりと睨みながら、

「蟻の一穴よく千丈の堤を崩すとかや、御油斷あつては天下の御大事で御坐るぞ、なれども差當つて御當家と伊達家の間、もしなほ一皮を剥けば、石田殿、御手前と拙者が心次第ぢや、おのゝ主家の御ため、後ともいはず今この席にて刺し違へ申さうか」

原田一流その面魂のみかは、うまれつきたる大膽不敵の炎焔を真正面より石田の面上へ吹ツかけぬ、

あまり御當家が過分の御世話下されしを、田舎者の律義一片に取違へて、同じ亡ぼさるゝ伊達家なれば武門の習慣、城を枕に討死せむとの覺悟なるべし、また今まで江戸に在ッて一人萬事を取扱ひしこの甲斐などは、何とやら譜代恩顧の誼を捨て、御當家の物となりしが如く疑はれし今更、一身こゝに愁ひの申譯を立つべき暇もなし、いざ然らば石田殿、互に身を殺して各その主家を保つと共に天下の御大事を救ふの一計、たゞ根本たる御身と我と刺し違へて死するの外なし、御返答いかによ、よい死場で御坐るわと膝おしつめて脇差に手をかけし面魂の怖ろしさ、すはといはど忽ち引ッ組むべき甲斐が猛勢に、さすがの石田彌右衛門、はッと驚いて片手を上げつゝ、

「待たれい甲斐殿、江戸と仙臺とは九十餘里の道程、足下と我とは四疊半に膝と膝との切迫、急かるよな、急かるよな、生命は惜み申さぬぢや」

されど甲斐こゝぞと思ひ切ッたる顔色なほも脇差の柄を放さず、

「固より御當家の御手にはつかれず、さらばとて今更ら國元に走せ歸ッて味方の白刃に犬死もせられず、なるほど、この甲斐一人に腹切れとの御心か」

「なか／＼以て」

「いざ然らば兼てより申し上げし如く、御當家の一切を取扱はるゝ石田殿、恐れながら館様に内々お勧め申し上げて、時は今なり、この原田甲斐を天下取の御用に召使ひ賜はるか、もしその御用とならば、生死の境目を此世の花と心得、大悪無類の曲者と唄はれても武士冥利じたい石田殿、お互に人の家來と生れ合せたればこそ斯くの小事に苦勞も致すぢや、酒井家の三千石が御身の沽券でもあるまい、我とても奥州信夫の八千五百石が前世より定まりし價値では御坐らぬ、さても斯くいふ原田を反逆の種と思召さば此座に於ての御成敗、な

れども、およそ甲斐ほどの男に、これほどの本音を吐かして其まよに差置かるよか、御返答ぢや石田殿、なんとで御坐る、八幡梵天うごかし申さぬぞ」

主客の勢ひを逆様に取り攻守の辯を捻ぢ返して、射るが如き眼光じろりと睨みつめたる原田の血氣に、當世なみくの男ならば五體その場に居縮みて言句もなかるべき筈ながら、石田彌右衛門また不敵の横紙破り、しづかに首肯いて膝を進めながら、

「甲斐殿、さてく足下は思ひしよりも幾倍の太骨、英雄ぢや、彌右衛門とても本音を吐かば三千石取を無上の男では御坐らぬ、さらば我手にある雅樂頭に入しれず天下取の一大事を勧め申さうわ、また足下を韓幄の人と頼み参らす、してまづ雅樂頭への證據には」

「館様への證據には今日このまゝ甲斐の一身を御手許に委ねて、一步たりとも御門の外には出で申すまい、憚りながら日夜御前の左右に侍して御用を承らむ、もはや伊達家には歸

らぬ覺悟」

「天晴、その御心體ならば、なれどもこゝに一つの土産物、御持参下されまいか」

「御所望の土産物とは」

「まづ此度出府の片倉小十郎が生首、足下の御手より一見いたしたい」

例の甲斐一流が面魂に飽まで殺氣を含んで脇差に手をかけながら、忽ち主客の勢ひを轉じ攻守の辯を逆様にして石田が膝下へ詰め寄りつゝ、聞かへ怖ろしき此泰平の世に天下取の謀反をすよめたる一言の下、南無三寶、彌右衛門もまた大の曲物、さらば手前主人への土産物として、幸ひ出府の片倉小十郎が生首御持参あれとぞいひぬ、

さすがの原田甲斐も今ぞ最後の一失、はッと思ひしが古今に稀なる不敵人の習慣、こゝに嗣

骨ほねいよく落おち付ついて、閉とぢたる兩眼ふたばなじろりと見開みひらきながら、

「承知しやうち、しかと承知しやうちいたした、奥州おくしゅう五十四郡ごじゅうしよくの身代みんだいに取とつては實まことに棟梁とうりやうとも基礎いしきともいふべき白石しろいしの嫡々ちやくちやく、片倉かたくら小十郎せうじちやうが生首なまくびすばり掻かき切きつて進上しんじやう申まうさうわ、たゞし其上そのうへにて當館たうかんだま様さまより甲斐かひへの下くだされもの、つまり天下てんか取との御用ごように召めさるべき證據しやうこの一品ひつぽん、そもく何をなにがな賜たま

はるべきや、念ねんのため前まへ以もつて、そと伺うかがひ置おきたし」
「御尤ごもつともの仰おほせながら、彌右衛門やゑもんいまだ其程そのほどの御返答ごへんたふは申しかねる間あひだ、片倉殿かたくらどのの首しるしに引替ひきかふべき御所望ごしよぼうの一品ひつぽん」

「恐れながら當館たうかんだま様さまより御自筆ごじひつの一書しよ、首尾しゆびよく天下てんかを我物わがものとせば原田はらだ甲斐かひに百萬石ひやくまんいしを遣つかはすべしとの御墨附ごすみづを願ねがひたい」
こよに至いたりては石田いしだ彌右衛門やゑもんまた最後さいごの一失いっしつ、なれども劣おとらぬ膽男にだんおとこの常つねとて、しづかに首肯うなづ

きながら、

「弓矢ゆみや八幡やっぺんその儀ぎは御懸念ごけんねん御無用ごむよう、石田いしだ彌右衛門やゑもんしかと引代ひきかへて進しんじ申まうさう」
男おとこと男おとこの言葉ことば、武士ぶしと武士ぶしとの契約ちやくぎよ、さらばとて原田はらだ甲斐かひそのまゝ立去たちさるや否いなや、汐留しほどめの屋敷やしきへは歸かへらず、傳馬でんば町の片倉かたくらが宿やどを訪まつて一室いっしつのうちの物語ものがたり、あはれ逆巻さかまくこの瀬戸せとを如何いかに泳およぎ出いでむとかする、二人ふたりが額ひたいを鳩あつめて私語ひそかく襖ふすまの外そとに、をりしも何心なにこころなく立聞たちきさせしは小十郎せうじちやうが譜代ふだいの逸物いもつ、川畑かはた丹平たんぺいこいつ稻妻いなづまの如ごとき空竹割からたけわりの一本調子ほんぽんてうし、さても危あやかりける、

金谷園きんこくえん裡りの梢こすさに生なじたる名果ないくわこよに一つ、原田はらだと石田いしだが互たがひに皮づつ剥むき合あうての今は、南みな無む三寶さんぼう、かちりと庖丁ばうちやうの先さきに當あたつて現あらはれたる榎核えんかくの捨場すてばを何なんとかする、
石田いしだ彌右衛門やゑもんよりは當時たうじ出府しゆつふの片倉かたくら小十郎せうじちやうが生首なまくびを一見ひんしたしと切り込み、原田はらだ甲斐かひよりは

その引替證文として大老自筆の一書、しかも憚りながら甲斐推參の眼前にて御判形を戴き、天下取の上には必ず百萬石を賜ふべしとの約束を迫りつゝ、言葉は淺けれど心の奥底ふかき兩雄しづかに別れて後の振舞また何とかする、

何事も口に出づれば後ともいはぬ稻妻の甲斐、石田の屋敷を立去るや否そのまゝ人しれず小十郎の宿を訪うて、額を鳩め膝を組んでの談合密策、あはれ神も知ろしめすまじと思ひの外、こゝに譜代の若黨川畑丹平が横越の小耳に挿んで、其夜より俄の大熱に枕も上らぬ不時の病體、ざりとて小十郎は一時の猶豫もならで國元へ立歸らむとの性急、吉沼たゞ獨り主と朋輩との間に心を碎き氣を揉む風情に、小十郎は居残りて介抱せよといひ、丹平は主の供に外れて朋輩に盡す本文いづこにありと争ひつゝ、互に果てしなき其日の夕暮方、忽ち小十郎の姿見えざるより丹平は枕刀を取つての大喝一聲、おのれ不覺の奴め、さらぬも外に人なき君

が忍びの旅に後れて、あとに残りて醫藥三昧いッの間に習ひをツたかと、飛び跳ねての憤怒に吉沼それと思ひ切つての一散駈け、道は一筋、街道の主が後を追ひぬ、

主従が吳々と頼み残せし宿の主人の手前、なほ三四日は其まゝ一室に閉ぢ籠つて枕を上げざりしが、いざや今は心易しと、固より虛病の川畑丹平當年三十一の武者生育、いづこともなく立出でたるまゝ更に歸り來らぬ心中の一物には、恐れながら分家殿、續いて聞き及びし大老の腰巾著石田彌右衛門といふ奴、どれほどの早業かある、母の胎内より鍛え出でたる仙臺骨の一流拜み討、へゝゝゝ刀は新刀ながら天正助定の大荒身、さても面白の世の中や、つさせぬ兵の名は未までも、いざ然らば、

世に聞えたる天下の名家、我ためには祖先傳來の君恩、その伊達家の興廢を奥州五十四郡の

領地もろとも一朝の運に賭けて、いはゞ四海の成敗も心のまよなる下馬將軍を敵に引受けての活動、しかも弓矢の戦鬪ならば一死を武夫の花として易けれど、今この泰平の世には人しれぬ心と心の劍を磨いで太刀討、されば原田甲斐いかに大膽不敵の男なればとて、夜更け人定まりて後の沈思黙考、さては曉に残んの燈火かよけて枕を敬つる百計千慮、おもへば哀れなりける、

ましてや本國には世に唄はれたる四十八館の名の下に田舎生育の律義一片を守つて事と物との變通を辨へざる老輩、それも尋常地下の武士ならば招いて説き伏せむ工夫もあれ往いて理解を諭すの手段もあれど、いづれも譜代恩顧の郎黨數多を養うたる城持陣屋持、かつは年ごろ我を嫉妬偏執のあまりに事あれかすと覘ふ矢先へ、なまなか立つて的とならむも策略なし、よしや的となつて我一命に彼等の心を慰むればとて、そもく今の伊達家に原田甲斐死して

何とかする、

それに引代へ、またこの江戸の藩中諸士いづれも浮雲に等しき一時の華奢に酔うて、百年いたづらに泰平を夢みるのあまり、たゞこれ物に驚き易く事に叫び易く、權威に恐れては忽ち手も足も出でざる徒輩、敵に逢うては其座に腰を抜かして再び起つべき勢ひもなし、されば平生は自己が額を叩いて我に媚び諛ひながら、いさゝか事ある時は駈け抜けて本國への注進手柄顔、

あはれ本國には本國の敵あり、また江戸には江戸の敵もあり、しかも前門よりは分家の野心、後門よりは下馬將軍の横車、いはゞ四面楚歌の聽裡に一身を埋めて君家の盛衰興廢を雙肩にかけつよ、さしせまる死生の間に顔色も變へざる原田が心中いかに苦しかるべきぞ、かつまた石田に約せし片倉が生首、そのまゝ胴につけて本國へ立去らしたる上は、我より迫

りし大老自筆の一書なかく手に入るまじきのみか、もしこよに一步の足場を失へば萬事たちまち休すべき刹那の活動、髪の毛一筋に千斤の鐵を曳くとは世諺ならぬ今の我、いさや駒形の隠宅に忍ばせし氏家平六、菅野小介、吉田周作の三人を使ふべき時節到来、さては哀れの女が血に泣く風情を見るべき時も來にけり、

一死は鴻毛の風に吹かるよよりも輕けれど、一心は片手に千斤の鼎を扛ぐるよりも重き活動、死して千辛を脱るとは易く、生きて萬難に處するは難し、あはれ羨ましきは我手の白刃に伏して一時に浮世を去るべき匹夫の身、さても苦しきは萬夫不當の地に立ちて長く死生の境を歩む一身、たゞ弓矢神の照覽あれかし、こよに原田甲斐が人しれぬ腸を絞つて眞實の一念を貫く大忠大義、よしや草叢の土饅頭に香華は絶え百年の後まで淺ましの名を唄はるとも、

此頃は絶えて訪はざりし駒形の隠宅、幸ひ竊に養ひ置きし三人の男に夜更けての後の内用もあり、あはれ天下に數ある武士も武士、およそ我ほどの不運者に册いて友白髪の末までも花を夢みる可哀の女の行方おもへば、餘所ながら辿り行く道も寢物語りに教へ置かむと、例の草履取ばかりを召連れて、その夕暮より立出でぬ、

満碗の死毒を舐るとも五體さらに平然たる甲斐、さながら物見遊山の歸るさに小唄うたうて立寄りしが如く、笑を含んで其まよ平生の一室に打通れば、律義一片の昔氣質に唯うろくとせる家守の老翁、たとひ世が逆様にならうとも此君にこそと思へる露が風情、いづれも敵心を翻して生命を我に呉れたる三人の男、おもへば見れば今更に涙なりけり、夕餐まだしたよめねば、まづ酒もて來よ、今宵は酔うて夢みむと、給仕に出でたる露に一言一言の戲談いつに變らず、さはらば落ちむ草の葉末の身ぢや、はよよよと大事にせよと盃

の数も常よりは過して、ころり身を横へながら、あの氏家と呼べ平六を呼べとぞいひぬ、
汝とは曉までの寝物語ゆるく、急ぐ事かはと言はれて顔うち赤めながら、つツと立去り
し露が後姿、あはれと見遣る程なく入り来りしは氏家平六、甲斐しづかに差招いて、容をあ
らため膝を進め聲を潜めぬ、

「何の風情もない隠宅住居に大の男が三人まで、罪なくて見る配所の月に等しいとは眼前さ
ぞ退屈でがな、いかに其日を暮して居るぞ、はよよよとところで今日は甲斐、いさよか御
身等に鬱晴らしの土産物を持参いたした、見事心よう受けて給るか、原田一流の名物に仕
上げたる家傳の美味ぢや、少しは齒節に應ふべき筈」

じろり見込んだる甲斐が眼中、はや尋常事ならじと平六まづ覺悟の胴骨おし据ゑて、
「いづれ美事の御料理、我等風情の筈には恐れながら、下さるよもの戴かではは」

「むよ、その腹中を見込んで、お身一人まづ呼んだぢや、もし後の二人が辭退いたせば何と
する」

「御念に及ばず、二人のもの、もしや箸つけませぬ時は、膳を並べたまよの抜討、八幡、仕
損じは致さぬ覺悟」

「天晴、さらば語らう、その耳これへ、四邊に人はなくとも」

汐留の屋敷に座を構へては扇子を膝上に内外江戸一切の支配を預る原田甲斐、男振いさよか
年輩より老けて凛々しき凄味のうちに眼を光らす體、いかな不敵者も忽ち畏縮んで動くまじ
き猛威ながら、さてこの駒形の隠宅にては何日とても身を横へて肱枕に小唄うたひつよ、飼
猫に額を舐められても笑うて背を撫づる體、まして花の露には世上なみくの浮世男となッ

て正體なし、

さるを何とかしけむ、今宵は夕餐の膳に對うて一言二言の露に戯れたるばかり、やがて彼方へ追ひ退けての後、まづ氏家平六を燈火の下に呼び寄せて四邊を憚る物語、つゞいて菅野小介、吉田周作、果は四人車座になつて夜ふくるまで、

あはれ日本三大名の江戸奉行として、八千五百石取の原田甲斐ともいはるよほどの武夫が、四邊を憚り人しれぬ密議を擬らす席に、いづれも敵心より翻つたる三人を選んで、さらに一人譜代恩顧の家來も交へず多年たがひに身も心も知り合うたる藩中の諸士を招かざるは、よくよくの一大事、さても心の中ぞ哀れなりける、

淺草寺の鐘の音も初夜を過ぎて又しばらく、夜ふけし秋の川水たど岸を囁む音のみして、をりしも空わたる雁金の聲に、いざ寐むとぞいふ頃、やうく手を鳴らして露を呼びぬ、

宵より小さき胸一つの女氣に何かは知らず思案の物思ひ、訝しげにたゞ一人娥眉を擧むる露路が、しよんほり燈火の影に反いて花一輪しをれかよれる風情を、甲斐しづかに見遣りて、

「こりや露、何日かは汝に言はむと思つたが、さて來る毎の面白さに紛れて、つい今まで、外でもないちや、昨日今日と過せし月日も、はや一年あまり、この分では五年十年も東の間、それもよいといたせ、なれども武夫に冊く女の身の心得、まして我等のやうに人にも世にも知られて重荷を背負ひし侍を男に持つからは、女ながらも世上なみくの女々しき事では叶はぬ、まさかの時の用意なほさら專一、はよよよとさりとて其事が今こよへ差迫つたといふではなけれど、いつ何時いかなる敵に出逢うて思はぬ身の果を取らうも知れぬが我等の覺悟ちや、その時に、あれ見よ、甲斐ほどの男が平生の魂魄うち込んだる女にも似ず、さりとては不出來の狼狽へやう、などと淺ましき世上の口の端にかよらぬ心得、

もし我等が不意の死を遂げし事もあらば汝なんとぞする、や、その涙は、はて泣くに及ばぬ、何を泣く事かは、町人に嫁すればとて夫婦もろとも同じ日に死すべきものでもない、いづれ後るか先だつか遁れぬ世の常事、たゞ武士が口からは斯うも尋ねるぢや、の、神かけて友白髪ともしろがの末までとは思へども、祈れども」

萬夫不當ばんぶふたうの眼中がんちゆうに涙一滴、滾こぼさぬまよに宿らせて打仰うちあふぎつよ、

「こりや露つゆ、なんとぞ言へ、それ言はれずば、この隠宅いんたくに汝が生涯安樂せいざいあんらくの黄金こがねを添そへて、今夜かぎりこぎりに身の暇いさまを呉くれう」

「御家ごへの一大事だいちじ、恐れながら御人拂ごんひらひの上うへにて、御前ごぜん近ちかう原田甲斐はらだかひこよに俄にわかの伺候しこう」
公然こんぜん當番たうばんの取次衆とりつしゆうを頼たのまず、わざと奥殿おくでんふかく夜中やちゆうの女小姓おんなこしやうをもて申し入れぬ、

伊達家いだけの當主たうしゆ陸奥守綱宗りくおのしつなむね、當年たうねん三十四歳さんじゆうさい、四海よふかに轟とろろく政宗まさむねが嫡孫ちやくそんに生れたれど、千代田ちよだの殿でん中に響ひびき渡わたりし大音おほねの忠宗ちゆうしゆが一子いっしなれども、何とせむ天性多病てんせいたひやうにして幼少おんせうより醫藥いやく三昧さんまいに育ちしかば、五十四郡ごじゆうぐんの世よに立ちても事の煩わづらはしきを嫌きらひ物のむづかしきを厭いとひつよ、兎角とかくに太平無事たいへいぶじの世よに大名氣質だいまうかち、たゞ奥殿おくでんにのみ日を送りぬ、さればこそ善惡ぜんあくなき世上せじやうの口の端はにかよりて、酒池肉林しゆちにくりんの戯たはれに身を損そねし過淫くわいんの果はてもいはれ、あるは賤いやしき廓くわくの遊女いづせよを抱かへて人しれぬ下世話げせわの華奢くわしやに耽ひるとも唄うたはるゝ事こと、その家臣かしんが分ぶんとして如何いかに口惜くちやくしかるべき、されど何とせむ、うまれついでついでの病體びやうたいやうく式日しきじつの外ほかは諸家同然しよけなみなの登城とじやうも叶かなはず、月のうちつぎに兩三度りやうさんどの外ほかは公堂こうだうに出いでて諸士しよしにも逢あはず、日夜にちやたゞ鬱々うつくとして醫者いしやと女原おんなはらのみとに團だんはれぬ、

されど江戸えど一切いっさいの奉行役おつややくとして原田甲斐はらだかひなほさら重荷おもにの一身しん、ましてこれまた天性てんせいいかなる

大事ありとも物に動ぜず事に走らぬ元氣不敵の男なれば、綱宗いよく萬事を甲斐に打任せ
 て事にかよはらず、甲斐は一入さらに綱宗の病體を思つて事に煩はさず、主従たま／＼差對う
 ても浮世の雜談さては月雪花の沙汰のみ、十年以來いまだ曾て奥殿ふかく驚かさざりし甲斐
 が、一大事とて俄に不意の出仕そも何事ぞと、そのまゝ呼び入れて四邊の人を拂ひぬ、
 甲斐しづかに差寄つて容を改めながら、ふりあけたる雙眼に男泣きの溜涙、しげ／＼綱宗の面
 上を見上げて後、またもや差俯いたる體、それも諸士なみ／＼の男ならば然のみに驚愕もな
 けれど、滿身これ膽と唄はれて産聲さへ人に違ひしと聞く甲斐が今こゝに訝しの體、綱宗お
 もはず脇息の手を放ちて膝を進めぬ、

「其方が一大事といふほどの儀、じたい、如何な次第ぢや」

「はッ、今更ら何とも申し上げべき言葉もなき次第、されど申し上げでは叶はぬ次第、不肖の

甲斐こゝに一命を捧げての御願ひには、勿體なき事ながら、あはれ何卒、この上の御養生
 かた／＼御一生涯の間、麻布の御下屋敷へ入らせらるゝやう」

「むゝ萬事の仔細は後で聞く、まづ差當り、この館に誰か主人となるぞ」

「こは異なる御意を承る、御前これより御隠居の上、そも／＼何者が伊達家の世に立ちま
 するや、申し上げずともの一儀さても／＼御言葉、この甲斐うらめしう存じまする」

「さらば子息龜千代に、世を譲れと申すぢやな」

「御幼年にましましてども、正しく君の御世嗣」

「してこの一儀は、本國の元老どもが評議の上か、但しは其方を始め江戸詰の者共が願ひか」

「恐れながら、いかに御病體に渡らせ給ふとも、今は太平無事の世の中、なんとして我等臣
 下の口よりかくの儀を申し上げらるべきや、全くは將軍家よりの御内意として、大老職酒

井殿が竊の執達

さすがの原田甲斐、おもはず兩眼の溜涙ほろ／＼と滾しぬ、

病身なれど年いまだ三十四の綱宗、しかも心のみは奥州伊達家の嫡々、平生より青ざめたる顔色さつと憤怒の赤みを帯びて、乗り出せし膝もろとも兩の拳を震はしぬ、

「甲斐、近う進め、甲斐、こりや甲斐」

「はッ、はッ」

「予は元來の病身ぢや、人にこそ言はね、心中には、せめて龜千代十五歳ともならば、やれ嬉しやと世を譲つて隠居せむとの希望、また今しも其方が申す段々、なるほど先祖へ對しての遠慮、國のため家のため身のため、家臣一同うち揃うて涙ながらの儀と思へば、さのみ無念にもないが、こりや甲斐、將軍家よりの内命と聞いては弓矢八幡、心外に存する

わ、口惜しう思ふぞよ、たとひ病體として式日の登城を缺きし事なく、もしや、いざ合戦の

曉となつても、太平の世に醫藥三昧の綱宗、やはか無病息災の諸家には劣らぬ覺悟ぢや、

また其方を始めとして本國江戸に多くの家來を養ふこと、そもや何がためぞ、大名の働き

と匹夫下郎の業と一つにしての勝手沙汰には綱宗まかり受けぬわ、まして外様の上席、い

はど客分の伊達家、はよよよ元龜天正のむかし一步先の武運に叶はど徳川殿ともいは

せぬ政宗の嫡孫に對うて奇怪至極、進め甲斐、當年三歳の龜千代が用に立ッて、病身なれ

ど父の綱宗三十四歳が用に立たぬ理由、まづそれを聞いての上ぢや、第一あの酒井家どれ

ほどの家柄ぞ、分家の子息市正に呉れたる嫁女を追ひ歸して後、綱宗あらためて將軍家に

見參しようわ、奇怪々々」

平生は多病にして鬱々たる性ながら、一たび發して怒らば英傑の雫、さながら狂うて飛瀑の

如し、

かくあらむとは兼てより覺悟の甲斐、今は唯こよに涙なりけり、さらに膝を進めていふ、

「只今、御憤りの段々、かく申し上ぐるまでには、譜代の臣下たる我等まづ、どれほどの骨に刻み腸を破りしやらむ、憚りながら御賢察を願ひ上げまする、なれども、もしこよに御意の程を守り奉らむとすれば弓矢の外なし、さてその弓矢の次第、一年二年の籠城は勿論、將軍家に一泡ふかせ参らせて天下の荒膽取挫くのみの儀なれば手のうちに御坐れど、最後の勝敗いづれかは差當つての難問、さらば眼前の御憤怒を晴らさむがために連綿たる伊達家の礎を賭物といたすべきや、近くば蒲生といひ葦名といひ加藤福島その他の諸家にも凡例あること、それを思召し別けられて暫らく敵の鋭鋒を避くるがため、十年後に譲らせ給ふべき御代を、今こよに加之も正しく御嫡子に譲らせ給うて伊達家萬代不易の基を開

き給ふべきや、兩様の儀いづれなりとも思召次第、甲斐を始めとして御恩の端に列るほど
の者は、善惡ともに御奉公專一と申し上ぐるの外は、はッ、もはや何事も」

いひつゝ面をあけて見上ぐれば、綱宗おもはず頭を垂れて默然たる體、さても痛はしの君や、あはれ事むづかしの御不運に生れ給ひしものかなと、今は滿面に涙を浴びて甲斐さらに泣り寄りぬ、

「もし御幼年に譲り給ひし曉、また二度目の難題として、あの分家殿を後見とすべきの嚴命あるは必定、恐れながら萬事さらりと打明けて申し上ぐれば、これぞ全く分家殿が多年の野心、ついでには酒井家が懸命の後楯、また深く察すれば徳川一流の人しれぬ手段として、とかく客大名の力を削ぎ勢ひを薄らぐ一計」
「むよ、して／＼この綱宗が隱居の後、幼年の龜千代に分家の後見なほさら何として防ぐぞ」

「一たび敵の鋒を避けて其術に乗せられたる風情そのまゝ其懐中に入りし上は、原田甲斐おもむろに後見の分家殿と引組んで古今不忠の魔界に落ち果て、ついでもあらば酒井家までも冥土への友連れ、神も知らしめさまじ眞實この一念を存するものは、本國の片倉小十郎たゞ一人、偕これ御物語すぎし慶長年間、徳川家康公の心中に怖ろしきものは加藤清正、その清正を京都にて馳走の砌、悉く死毒を入れたる米饅頭を差出せしに用心ふかき清正さらに手をつけざるは豫ての覺悟と徳川恩顧の一人まかり出でて、眼前の毒饅頭を二つに割つて自己まづ喰ひし後に進めしかば、さすがの清正も馳走の手前つい手を出して、それが原因の頓死、されば凡そ大敵を殺すに身を全うしては逆も叶はぬ事、不肖ながら甲斐いひつゝ見上ぐれば、綱宗つつと江り來て原田が手を取りぬ、

「甲斐、過分に思ふぞ」

「はッ」

「伊達家の守護神、身が家來筋とは思はぬぞよ」

「はッ、はッ」

人しれず君臣たがひに手を取つて泣きし前夜の涙、いかに其夜の曉かけて生れ得たる大勇の腸を断ちけむ、まだ乾ぬ今朝の兩眼うるみながら、大廣間に藩中の諸士を招いて俄に評定を開きぬ、甲斐は繼上下の姿たゞしく正面に坐して、左右に居流れたる當家の重役二十六人、

「今日、あらためて面々に申し談すべき一儀は、昨夜、この甲斐を奥殿に召されての御述懐に、元來の多病、此頃は別けて身に重う疲勞も出で、もはや世に立ちて事むづかしい仔細

を耳にするも嫌なり、されば幼年ながら正しく家の嫡々、龜千代に家督を譲つて隠居した
 いとこの御意、まだ四十にもならせ給はぬ御身の、いかなれば斯くは俄の仰せぞと、なほ押
 し返して段々の御所存を伺へば、全く浮世が大儀に思召さるゝよりの事、また風月を友と
 して何事も氣樂に身の養生を怠らずば、この病體いつかは息災になるべしとて、いかに申
 し上げてても只管に通世同様の御意、ついでには面々なんと思はるゝぞ、本國の元老衆へ打合
 せの前、まづ以て御膝下に江戸詰の躰を固め置くが專一、以上の次第、いづれも腹藏なく
 承りたい

いひつゝ扇子を膝上に五體の力を眼中に含み、ずらり一座を見渡しぬ、
 かねてより大老酒井家が何とやら當家へ對しての難題、つゞいて虎の威を假る分家が近來た
 だならぬ怖ろしの目色、かれこれ打合して、藩中の諸士も兩派に分れたるほどの騒動、いま

だ根を絶たざる物騒の今こゝに卒然として奉行職たる甲斐が口より當主隠居の沙汰、宛が
 ら暗闇の鐵砲玉に胸を射貫かれし心地して、善惡ともに座を進んで物いはむとするものなく、
 諸士いづれも呆氣に取られたる面上、甲斐さらに見渡して一段しづめる聲を絞りつゝ、

「面々いざ打揃うて席を進められい、只今この甲斐が申せしは、勿論、君の御言葉に相違な
 けれど、これは一應の表沙汰、全くは、うすく聞きも及ばれむ、かねてより分家殿の非望、
 それが俄の羽翼を生じて、今は將軍家よりの御内命となり大老酒井家の執達、君にも無念
 心外この上なう憤らせ給ひしが、さて段々と御理解を含んで後の御言葉には、將軍と大老
 に反いては弓矢の外なし、まして我は斯る病身、嫡々の龜千代に譲つて兎角は家の安全を
 圖るが專一、ついでには本國の元老どもが事の仔細も辨へず田舎氣質の一片に物とり狼狽へ
 て無用の騒動いたさぬ爲、予が自筆の一書を送るべしとまでの仰せ、方々なんとせらるゝ、

輕重の利害、大小の得失、こゝが家も身も賭けての大事で御坐るぞ、上の空の詔讀挨拶か
 たく無用、心にもなき當座の舌三昧なほさら無用、目には見えさせ給はずとも政宗公まし
 ます御前と心得て、武士冥利、金鐵不動の言葉を聞き申さう、承るは不肖ながら當家譜
 代の死士、原田甲斐で御坐る」

さらぬも物凄き眼中に血筋を引いて睨めば、諸士おもはず首を縮めて肩を濁めぬ、

原田甲斐 續編

英雄が無言の涙一滴は美人千行の泣く音よりも哀れ深く、大剛の士が眼を閉づる一夜の憂苦
 は匹夫生涯百年の不運よりも悼まし、生きて十倍の名聞に代ふる生命さへ人は惜んで捨てか
 ぬる世の中に、これはまた後の世までの不忠不義を甘んじて萬夫不當の一身を抛つこと、お
 よそ古今に凡例の數のあるべきやは、
 されば此頃の甲斐、一入さらに何とやら身をせめて慎み深く、夜は人の定まるまで閑に燈火
 をかよけ、曉は東天の鴉に先だちて起き出でつゝ、今日しも奥の一室に年來の日記などじき
 後に取亂さじと掻き集むる折しも、酒井家の石田彌右衛門が方より一封の書狀、
 片倉が生首持參の約束しながら、其後わざと違へて何の沙汰も届けねば、さてこそ催促きび

しき手詰の書中、却ッて此方に待ち受けたりと披いて讀み下せば、おもひきや其事にはあらで案に相違の南無三寶、

昨夜たゞ獨り友を尋ねむとて立出でし途中、一人の曲物、我影を慕ひ來ッて背後より星明りに討ち掛くるまよ、ひッ外して返り討に致せし其屍を見れば、姓名こそ知らざれ、仔細あツて面貌は拙者近來よく存じの者、過日中出府の片倉殿が召連れられし若黨なれば、そと御手許まで此段しらせ參らす、御他言無用、但し死骸の儀は此方に引取ッて厚く葬れりとの文言に、流石の甲斐はツと驚きぬ、あはれ不覺者奴が時も折も知らいで入らざる場合の忠義立、さては我と小十郎の物語を小耳に挿んでのいかせぎ、志は憫れむべきも愚直一片の働き兎角は斯の如し、それにつけても心ならぬは田舎生育に凝り固まつたる本國の老輩、また慙かに事を辨へ顔なる江戸の諸士ども、

されば國許に片倉をもて忠臣無類の名士と尊び、江戸に我をもて毒惡無上の奸雄となさば、正邪こもく明かに凡俗その道に踏み迷はず、いはど雨後の明月さらに伊達家を照らし磐石の礎ながく建て直るべきも、元老の徒輩なまじひの小智慧に眼を光らし勤番の諸士もしや詮なき才氣に事を起さば、忠奸いよく入り亂れて騒動ますく月を重ね年に涉りつと、果は元來の野狐に漁夫の利や與へむ、

あはれ今は本國江戸もろともに力を合して一時も早く我を憎めかし、痛はしけれど其第一とし一君を麻布に移し參らせむ、本國の元老に沙汰もなく我一人まづ君を移し參らせなば、さらぬも多年の嫉妬偏執を受けたる身、忽ち四面に楚歌の聲立ちて孤城落日となるべきは必定、されば我より志を翻して駈け込むが如くに見せずとも、分家の兵部といひ後楯の酒井といひ、彼方より來ッて我を扶けむ事これまた必定、さても降らで叶はぬ雨ならば雫も残さず

降れよかし、吹かて叶はぬ風ならば木葉も残さず吹けよかし、

たとひ江戸内外をあづかる一切の奉行たりとも、伊達家の家法として千石以上の藩士を進退するには、一人の工夫おのれが器量のまよには叶はず、こよに本國元老の當番三人衆と打合せべきほどなるに、原田甲斐をもく何の狂態ぞ、近來しきりに分を亂し格を破り我意を募つて傍若無人に振舞ふのみか、不思議の奸悪、古今の佞毒、人しれず君に迫つて麻布へ移し参らせ、當年やうく三歳の幼君を立てしこと、さては彼奴が多年の野心こよに顯はれたりと、本國仙城の騷動は宛がら鼎の沸くが如し、年久しく忠に似たりし大奸の曲物、まことに獅子身中の蟲、あの甲斐奴を捕つて引摺り歸りし上、縛り首を打つて萬人道路の獄門に曝すべし、さは然りながら十年江戸の内外を引受けて

日夜に植る付けたる名聞の根も深ければ、藩中の内心また彼奴が毒酒の盛鹽梅に酔うて性根を失うたるもの多かるべく、かつは諸家他門にも手を取り心を繋ぐの味方あるべく、第一が分家の非望と下馬將軍の後楯を取つて自己が藥籠中の物とせしは必定、さはなくて甲斐いかほど不思議の魔力ありとも、八千五百石の陪臣が公議へ對して五十四郡の大主を移し代へむに一朝の手を翻すが如く易かるべき道理なし、ましてや幼少より古今に稀なる大膽不敵の面魂、されば先君忠宗公も思はず舌を巻かれて、後年もしや伊達家を亡すものあらば必ず辨之助なり、後年もしや伊達家の危機一髪を救ふものは必ず辨之助なりと宣ひし言葉といひ、現在其子を見るは親に如かざる父の大内藏さへ、もはや打續く泰平の世には殆ど用なき我子の行末、誤つて萬人を失ふの事あらむよりは今のうちに討ち果さむかと、深夜いく度か涙の白刃を抜きしとぞ聞く原田甲斐、あはれ今こそ君父の言葉まのあたりの彼奴が本性あらはれにけ

り、しかも本國の我々に一片の談合もなく、いはゆる迅雷の耳を掩ふに違あらざる一夜の毒計
 奸謀、さては彼奴こそ却つて我々が血眼の出府を待ち受けたる體、おもへば古今ふしぎの大
 敵、なか／＼に油斷なるまじと、仙臺城中の武者堂に、曉かけての評定を凝らしぬ、
 をりしも夜を日について江戸より遁け歸つたる諸士の注進、さらに一入の浪風を起して元老
 の胸を轟かすのみか、津田十左衛門山口藤兵衛の兩人が綱宗よりの使者として、病體みづから
 隠居せし自筆の奉書、つゞいて原田甲斐が許より公邊御沙汰の寫書として、伊達龜千代を先
 代同様相違なく家督の一條、また龜千代十五歳の曉まで伊達兵部を後見とするの一條、そ
 れにつき元老の方々うち揃うて出府を待つと今更めいたる彼奴が添書まで、まざ／＼と四十
 八館の面上を逆撫でにしたる奇怪の振舞に、あはれ原田甲斐こゝに古今見事の大奸惡とぞな
 りぬ、

夜更け人定まりて後、大老酒井家の奥殿ふかく伺候せしは原田甲斐、かねての用意やありけ
 らむ、四邊に人もなくて燈火しづかに主客を隔つるのみ、ひけば應ふる廊下口の鈴の紐先に坊
 主三人、出頭の石田彌右衛門さへ今宵は襖の外に差控へて、小姓より受取りたる主人の一刀
 を捧げつゝ默然として耳を欬てぬ、
 人しれぬ忍びの参上ながら、甲斐は定紋麻上下に袷紗小袖の襟を正して、固より無腰のまよ
 に座を進みぬ、主人の雅樂頭は水色羅紗の長羽織に黒羽二重の著流し、小刀のみを帯びて満
 面あぶるよばかりの笑を浮べぬ、

「や、此頃の活動、靜なること林の如く疾きこと風の如しとは全く兵家の專一、流石は聞ゆ
 る原田一流、委細は彌右衛門よりも聞き及んで、兵部父子は勿論の儀、この雅樂も心地よ

「存ずるぢや、なほ此上とも偏に骨折を頼み入る、さても其後の様子は何とであるな」

「はッ、そもく、甲斐が本来の一念、恐れながら最初のうちは、たゞ一筋に無益の横車おし
かけ給ふとのみ御前を恨み参らせて、さす敵ぞと心得、いざといはゞ分家を血祭に五十四
郡を引ッ提けて太平の世の夢おどろかす一合戦と存せしところ、おもひきや、たのむ味方
が多年の嫉妬偏執に斯一身を取巻かれ、友朋輩が四面楚歌の聲に埋められて俄に大悪と唄
はれ奸毒と囃さるゝ次第、此まよ坐して手を空しうせば忽ち本國に引摺り歸ッて縛り首の
獄門にも曝さるべき切迫の場合、さても武運に盡きたる原田が末なり、一命を我みづから
斷ッて先づ藩中の嫉妬を解き怨恨を散すべきかとも存せしが、いや待て暫時、逆にと
順に守るは古今の難に處する方便の一つ、第一不肖ながら甲斐こゝに死しての後、あはれ
何者がこの伊達家を、しかも事むづかしき亂麻の中より」

「それ、それ、全く其處ぢや、分家の兵部は兎も角も、この雅樂頭が拳を握ッて乗り掛ッた
初一念、善にもあれ悪にもあれ、およそ天下の大小、やはか無事には差置かぬまで」

「御氣性のほどは兼てより手に取る如く伺ひ奉りし甲斐なればこそ、おのれが一死の易き
も得つかず、生きて徒らに奸毒の名に甘んじ、身は百年以來の一門一家に見放され友朋輩
に棄てられながらも、かく夜更け人定まッて後の参上、また迎も傾く伊達家の運命もし一
歩を誤ッて亡ぶるならば、この甲斐が一身を悪魔の犠牲として古今ふしぎの奸悪に終ると
も、正しく血筋は同じ流れの政宗が一子、あの兵部に家を取らせて萬代不易の繁昌を草葉
の蔭より見たきの一念、それについては申し上げずとも儀ながら、第一に御前の御威勢
いよく、第二には兵部が魂魄の半途に驚き挫けざるやう、さて其上には原田甲斐こゝに
磐石となッて肉は裂け骨は巢枯れて粉に散るまでも、たゞ祈るは雨後の明月」

「いさぎよし、天晴れ大勇の武夫、逆に取って順に守らむとは古今の英雄そのまよぢや、して兵部もし見事に志を果せし後、足下の希望は如何に」

「はッ、せめて、せめて、その砌には、この甲斐に尋常の一死を賜はりたし、さなくば圓頂黒衣の願望たゞ一つ、今にても、もしや、この甲斐が奸悪と唄はれずして伊達家萬代の策計あらば、恐れながら直ちに御前を敵として引受け参らすべき男」

「や、いよく潔し、さつても氣味のよき武夫とは足下ぢや、今この場に及んでも予に諛はぬ大勇の一言を、まことに名と事の一對、頼む甲斐あり、その一言を聞いて雅樂頭こよに安堵いたした、ついでには近來の仔細」

「我から鬼となつて一夜のうちに綱宗を隠居いたさせ、三日のうちに龜千代家督の願書を濟し、おツかけて兵部後見の儀に、本國元老の徒輩が上を下へと騒動の體まのあたりに見る

の心地、されば近日、血眼となつて出府すべき者どもの動靜を窺うたる上、あらためて、そと石田殿まで」

「むよ、して此後まづ何となるであらうの、國老の徒輩が第一の工夫は」

「いづれ聊かの血を見たる上、つまるところは此まよの泣寝入、なれども兵部一人の後見は必ず不承を訴へ出づべく、また諸家への聞えも當分如何の儀、ついでには龜千代が伯父に當る岩の間の三萬石田村隱岐守これを相後見に仰せ付けられたし、この隱岐守は元來の柔和一片たゞ婦女に等しきこそ幸ひ、却つて兵部が重荷を分けて相手に油斷さすべき眼前の一計」

「よいく、委細承知、くれぐれも頼むぞ」

「はッ、不肖ながら甲斐が一命に息の根の通ふ間は、大願成就の船切手と思召されて、ただ悠悠と流れのまよの御見物」

仙城の元老うち揃うて出府の前、一步先立ちて姿を窺し人目を憚りつゝ九十餘里の街道を四日路に馳せ付けたる者ども二十一人、いづれも一流一派を極めたる奥州生育の武邊者として、まづ伊達安藝が手よりは細川三藏西田幸左衛門都築兵之助の三人、伊達上野の手よりは市川宗太郎吉岡采女田中勇助の三人、石川駿河の手よりは山崎武右衛門中山兵左衛門、天童五郎左衛門が手よりは中川留三郎、鮎貝靱負の手よりは上原主水之助、伊達彈正の手よりは川口集人、葦名刑部の手よりは蜂谷仙之助山本國太郎松田重左衛門、田村隱岐守が手よりは島田大助杉本兵庫、こよに片倉小十郎が手には別けて諸家よりも多く内田常右衛門源左衛門忠三郎の兄弟三人に眞田正助宗像竹之丞の二人を差添へて、以上二十一人の死骨抛け出したる兵ども、妻子に水盃を酌み交はし親兄弟に暇乞して、おのゝ肌には南無阿彌陀佛の死装束、

譜代相傳の君家を自己が一朝の野心に賭物とせる古今の大奸雄、原田甲斐たとひ鐵壁の中に潜むとも如何ほどの用意ありとも、やをれ愚の業、およそ我々二十一人が四面八方より覗うたる曉は、袋の鼠、釜中の魚、まづ彼奴が首を斬つて本國へ届けたる上、おのゝ覺悟の前いづこに引出さるゝ事あればとて、主人よりは兼て暇を出されたる素浪人分の我々、たゞ大道の喧嘩沙汰となつて果てむのみと、腸を押し据る白刃を磨いで日夜に覗ふ折しも、汐留の屋敷を人しれず圍んで張番せし三人の者より、今夜こそ彼奴が大老酒井家へ忍んで行きしとの注進、今更ならねど儲こそ奸毒の金看板を見届けたり、さらば其歸途を待ち受けて幸ひの間討ち果さむと、五人三人おのゝ一團となつて途筋の物陰に潜みぬ、一の手もしや仕損ずれば二の手三の手まで、弓矢八幡うたせ給へとて、梅干を口中に含みつゝ總身の力を込めて待ちかけぬ、

これほどの事あらむとは固より覺悟の原田甲斐、江戸四方の口々に人しれぬ斥候を置いて手に取る如き此頃の振舞、人數しかとは知らねども慥に本國より死物狂ひの奴等入り込んだりと承知の今夜、まして初夜をも過ぎし深更に歸るべき途上、なんととして寸分の油斷あるべき、あはれ露いさよかも惜しからぬ生命なれども、おもふ一念みごとに果すべき其時までは、佛神も酌ませ給へや、こゝに大勇大忠の胸を劈く涙の雫を、

奥州信夫の館持八千五百石取には軽々しき振舞、五十四郡の江戸一切を扱ふ定詰奉行としては何とやら君威の薄きに似たりとまで、平生の出入ともに自己が影のみ伴うて飄然たりし原田甲斐ながら、此頃は俄の用意に身を固めて、今夜しも馬上の體、左右には氏家平六菅野小介吉田周作、その他には片山隼人堂守權三郎とて近來本國信夫の館より竊に呼び寄せたる恩顧の郎黨無類の古兵、つゞいて當分は殊更ら大切の身なりとて酒井家の石田彌右衛門より

送り手の武術者七人、以上十二人が馬の前後を圍んで定紋の提灯さながら闇の澤邊の螢火に似たり、

知らざる他國他門の者ならば兎も角も、同じ仙城に生れて身分の上下こそあれ現在のあたりに見もし聞きも及んだる古今不敵の原田甲斐が、かねて平生の身輕と思ひの外、前後左右に一粒選の大男を備へて馬上に眼を配る體、此方は暗し闇より見渡せば一入さらに怖ろしく、大地を踏み鳴らす蹄の音いよく迫り近づく今こゝに、固より一命抛け捨てよの業ながら流石に何とやら、二十一人おもはず首を縮めて躊躇ふ折しも、二番手に控へたる片倉小十郎が手の者ども内田兄弟眞田宗像あはして五人、おのゝ闇に閃く一刀を抜き連れながら、第一番手の安藝が勢を踏み越えて驀地向ひぬ、

「奸賊原田め、そこ動くなッ」

かよる大敵の闇討に躍り上つて聲をかくる事、片倉が選びしほどの兵としては何とやら不覺の業ながら、後にこそ思ひ合せ、今この場に何の思慮かあるべき、残る諸家の面々すはやと一時に飛び出せば、大音聲に叫んだる片倉勢の聲と共に、さしつたりと足踏み止めて抜き連れたるは氏家平六吉田周作片山隼人堂守権三郎の四人、酒井家の送り手七人わけて必死の血眼に足場を取つて、大切の客人怪俄さすなとばかり、馬の前後を圍うて真向に白刃を振翳しつよ、一步二歩三步と次第に引退りぬ、

かよる危機一髪の刹那にも菅野小介は元來の早業逸物、おのゝく持てる提灯を掻き集めて傍の松に馳せ寄るかと思れば、伊賀者の本性しのびの達者ことなりけり、宛から糸もて引上げらるよが如く大木の幹つるゝと傳うて、さし出でたる梢に五つの提灯を引掛けながら、

「やア曲者の面いちゝ見知つたるぞ、闇の火の手は占めたり」

叫ぶや否や大兼光の一刀を額際に當てよ今ぞ入り亂れたる敵味方の真中へ木葉の舞ふが如くに飛び下りぬ、

白日青天の下に一人二人の喧嘩より起りし太刀打ならば、いかに太平の世なればとて腰に人斬庖丁を横へたる互の勢ひ、たえて珍らしからぬ事ながら、松の梢に提灯の火の手をかけて木下闇に閃く三十餘人の白刃、こよに入り亂れて討ち合うたる珍事出来に、近き屋敷の者共は夢やぶられて飛び起きつよ、門々に定紋の高張を押立て警固の人数を繰り出さむとする體に、馬上の甲斐は鞍坪を打つて南無三寶、遁ぐる大剛こよなんめりと其まよ駒を引つ返して酒井家へ馳せ戻りぬ、

をりしも石田彌右衛門いまだ寝もやらねば、かくとの注進、つゞいて甲斐が急施の一策きくや否や、それと叫びざま二十餘人の手の者を引連れながら、駭足に一鞭くられて其場に馳せ付け

ての大音聲、

「天下の御膝下ちかく夜陰の騒動、おのれ等じたい何者ぞ、大老酒井家よりの見届として石田彌右衛門まかり向うたり、浪人ならば三族に及ぶぞ、家來者ならば主家に及ぶぞ、但し設けて俄の浪人分ならば三族主家を合して諸共の詮議ぞ」

大身の鎧を馬の平首に押し當てながら稻妻の如く乗り廻したる一期の大音聲に、はッと驚きつゝ太刀を引いて遁け出したる奥州勢に、仆れたるもの二十一人のうち十人、まづ安藝が手の西田幸左衛門細川三藏、上野の手の市川宗太郎中房助、石川が手の中山兵左衛門、鮎貝が手の上原主水之助、蘆名が手の松田重左衛門、田村が手の島田大助、こゝに片倉が手の田常右衛門源左衛門の兄弟二人は深疵を負うて這ひ寄りつゝ互に刺し違へて息たえぬ、また原田が勢に仆れたるものは、酒井家より送り手として七人のうち四人まで、つゞいて吉

田周作堂守權三郎、菅野小介は早業の逸物したよかの働きしながら左の耳を削り落されたるのみ、片山隼人は浅疵ながらも數ヶ所の傷に大刀を打ち折つて脇差ばかりの大童、氏家平六は兩刀の達者ことを必死に飛び廻つたる勢ひ亦は鋸の如く敵の血汐を浴びて朱に染りつゝ額に一ヶ所左右の肩口に三ヶ所うしろの腰車に横薙ぎの太刀痕、あはれ最後に何者のしたりけむ右の高股を貫かれたる深手に逢うて立つこと叶はず、たゞ幽に聲をあけて、本尊無事かくと叫びぬ、

かほどの大事ながらも、大老酒井家の威勢もて其夜のうちに敵味方の屍を扱ひつゝ、いづこへ運びけむ曉の跡を見れば土まで掘り返し踏み均して一滴の血汐も残さず、しかも諸家諸門の口の端を閉ぢて千代田の城中に風聞もいはず、たゞ傳へくゝて市中の夢物語にのみ囁されぬ、

四季をりくの風物に訪はれて月雪花に枕を歛つるの外は、市中ながらも更に浮世を知らざりし駒形の隠宅へ、氏家平六菅野小介片山隼人の三人が淺疵深疵を負うて醫者もろとも乗物に荷ひ込まれしかば、家守の老爺が老の腰うち抜かさむばかりの驚愕、わけて涙の露が身一つを何とせむ今こゝに、

ましてや三人のうちにも氏家平六は第一の深疵、とても一命覺束なしとや、附添ひ來れる醫者が枕を守りて隙間もなき療治の體に、露が悲しさ身も世もあられず、さすがに父子愛著の思ひ暫しも堪へ難ければ、そと襖の外に忍び寄る風情を、これはまた左の耳を削り落されたるのみ騎虎の勢ひ更に一倍の敵あれかしと待顔なる菅野小介が、剛に行かむとして思はず涙ぐみつゝ、此方へくと差招きながら聲を潜めていふ、

「まづ君の御身は無事息災、あの氏家殿とて然のみの疵にもあらねば、やがて醫藥の效能も近かるべし、さて元來これほどの儀は枕の夢にも人斬庖丁を放さぬ武家武門にはある習慣、お心たしかに持たれよ、たゞうろくと浮世の女めいては生涯の不覺ぞ、血を見て顔色うしなふほどの和女とも思はねばこそ、君にも人しれぬ幸ひの隠宅とて我等を此家に送られし手前、しかと性根を落付けて平生の體に在せよ、今宵は必ず君にも來ますべき筈、その泣き腫らしたる御目元きつい禁物々々」

其日も西に傾いて庭の秋草やうく露けく岸を嚙む大川の流れも白き夕まぐれ、裏河岸の棧橋に小舟二艘を漕ぎ寄せて友船そのまゝ繋がせつゝ一艘のうちより立出でしは原田甲斐、みづから木戸を叩いて人を呼びぬ、

うつゝの空耳にも外さぬ露が一念、まして小介に今宵は來ますべき筈と聞きしよりは、さら

ぬも秋の日の長きを待ち詫びたる露が、おもはず庭の草履を捨てよ木戸口に走せ寄りぬ、はや暮れての薄闇ながら笑を含める甲斐が體、おと露か、汝さへ無事ならば喃、はよと笑ふ聲いつもながらの甲斐なりける、

甲斐が裏河岸に舟を縛いで今しも庭に入りし時、さながら言ひ合せたるが如く表の路地口に一挺の女乗物を舁き据ゑつよ、仲間體の男まづ走せ入つて案内を乞ひぬ、

「此家に汐留屋敷より原田様の來せられし筈、これは本國白石の片倉が妻、澤と申すもの、そと御意を得たしとの口上」

本國白石の片倉が妻、澤と申す女、竊に御意を得たしと聞くや否、流石の甲斐おもはず眉を擧めて容を改めぬ、時も時なり機も機から、しかも今この隱宅へ押掛け來りし仔細、まして女の身の唯一人、苟且にも三萬石城持の内室たる身を持ちながら夜陰に向うての唯一人、

思へば小十郎いかに狼狽ふればとて迫ればとて、譜代恩顧の徒輩も多きに自己が妻を人しれぬ使者に立つべき男でなし、かつは妹の澤として兄の我に一世の餘波を惜めばとて原田一門滅亡の跡を扱ふべき内用を帯ふればとて、我本心を知り抜いたる小十郎が今かよる場合に許して出府さすべき筈はなし、さては妹め、幼少より小賢しき女の一念に何事か思ひ詰めて忍び來りしならむ、父も在さず母も在さず同胞とては彼たゞ一人の血筋、あはれ古今大剛の活動すべき覺悟の甲斐に今更ら無用の涙こほせとてか、

さればとて、わざと母屋に放れたる河岸庭の茶室に導かせつよ、まづ第一に氏家平六が臥したる枕頭を訪ひぬ、天晴武夫、見事の稼ぎぶり満足の至極、たゞ保養專一ぞ、おもへば譜代の主従でもなきに一朝の契を結んで今かくの體、固より我みづから藥を煮るべき筈ながら、知らるゝ如き身の境涯と手を取つて額に押戴きつよ、次の間に臥せる片山隼人をも慰め、ま

た菅野小介が居室に入れば、削がれたる片耳を布もて包めるのみ、元來したよかの活氣者、無事なる耳を甲斐が方に差向けての談笑ながら平生の顔色に、や、いつとても小氣味の善いとは足下の事ぢや、あの夜の手應へ凡そ幾人ぞと問へば、からくと笑うていふ、白晝に名乗り合うての勝負は兎も角、闇の多勢に向うて殺し殺さるよまでの太刀打は損徳しらぬ白痴の業と心得、憚りながら大兼光の鋒尖三四寸の間を伊賀者一流の水車に、あるほどの敵に飛び廻つて聊かづつの御見舞、はよよよよ敵の淺疵は悉く小介の徒ら事、さりとして一人として無疵に置かぬも亦小介の徒ら事と答へたる面魂、なほ此後の御用次第といひたけな

り、裏庭の茶席も嘸や待ちぬらむ、給仕は露、汝の外に入るべからずと命じつよ、庭の駒下駄しづかに近づいて、わざと聲をかけぬ、原田甲斐、只今それへ参る、

聲と共に身は客ながら流石に妹の澤女、燈火かきたてよ入口に手をつかへたる風情は、仙城隨一の美人、何とやら此頃の物思ひに打沈みて、やよ面瘦せたる武家の奥風儀いとど涙を渡りぬ、

互に座を定めて後、互に顔を見合して後、絶えて久しき心と心、争はれぬものは血筋の涙、まづ妹の目に宿りぬ、

「兄上には、いつも御變らせなう」

甲斐しづかに首肯しながら、

「和女も無事で重疊、まづ第一に御兩親の御墓所、その後なんの支障も無いか、ついては女儀の身で軽々しい俄の旅立ちやう、また夜陰に供も無い様子、じたい片倉殿、承知せられての上か」

いひつゝ燈火に照り返る兩眼じろりと見詰めぬ、

露けき庭の秋草に蟲の音しけく、をりから差出づる月影に大川の水すみ渡りて、何處ゆくらむ舟こく楫の音、誰が手遊ぞや流れを隔て、幽に聞ゆる三味の音じめ、さては道路の往來に唄ふ投節の聲、たゞさへ秋の夜は物の哀れの深きが上に、雅俗とりまぜて人しれぬ憂きを訪はるゝ心地は萬夫不當の大剛も腸を斷たると思ひ、まして母屋には我ために枕ならべし深疵の二人、淺疵の一人、今この席には、これぞ一世の生き別れ死に別れともなるべき血統の妹が山川はるくくと尋ね來し心の苦しき汲みもあへず、たゞ物の驚愕に打たれたる家守の老爺は興さめ顔、おろくと彼方此方に氣を揉みて身一つを運びかねたる露が哀れまで、かきあつめて胸に疊みし甲斐が一身を慰めむとや、心なき燈火も風なきに瞬きぬ、

「原田が娘、甲斐が妹、なれども今は正しく片倉小十郎が妻の澤女、そもく良人に乞うて

の上か但しは身勝手の旅か、第一この隱宅を何として誰が言ひ聞かせし、かつは女の身の夜陰に供もなき乗物一挺とは、じたいこの兄にどれほどの急用あつてか」

容を改め言葉を疊みかけて射るが如き兩眼の光りに、妹の澤女おもはず差俯いて膝すり寄せながら、

「良人ある妻の身として、九十餘里の山川はるく、それを許可もない身勝手の旅かとは、兄上とも思はれぬ御言葉」

「むよ、さらば小十郎殿が許しめされてちやの」

「此頃の江戸は治まる御代につれて殊更の至盛、今が見時ぢや、そと人しれず忍びて見物せよ、片倉が妻としては流石に人目もあり萬事に暗れがましう却つて心からの慰みにはなるまじとの仰せに」

「な、な、なるほど、や、分ツた、よく會得した、はよよよよよとて久しう逢はぬ間に、いかう奥風儀を備へて見ゆるわ、なれども二十六の今日まで、子を持たぬとは聊かの不手柄和女ばかりの罪でもないが、喃、小十郎殿も見かけによらぬ下手ぢやわ、はよよよよ」
 俄に肩を崩して聲高く笑ふ兄の面體を、今更に澤女しけく見上げて涙くみつよ、

「さてく、兄上が、思ひの外の御機嫌さ」

「世にあるかぎり、たゞ二人の同胞、その兄が機嫌の體を、妹の身として涙ぐんでの不審とは」

「その御機嫌を不思議に思ふ妹、無理と思召すからは、憚りなれど、もはや狂氣ばしなされてぢや」

「この兄の機嫌を訝るのみか、狂氣とは、さつても奇怪の一言、妹とて片倉が妻とて事に
 よらば座を立たせぬぞ」

「そらくしい其お言葉、情無や九州原田より奥州に傳へて聞えし可惜し名家も、あはれ兄上が世となつて俄の狂氣沙汰、そもや狂氣で無うては出来ぬ業、殿様を一夜のうちに押し籠め參らせ、まだ東西も知らしめさぬ幼君を立てよ、この末を何と遊ばすぞや、國許にては元老の方々が物の具とり出さむばかりに日夜の騒動、古今ふしぎの奸賊め、あの原田を捕つて肉を喰はむ、前代未聞の大不忠、あの甲斐が縛り首の獄門を見ずばと、聞く度々に胸を裂かるよ苦しき切なさ、なれども、今となつては何事の申し上げむ言葉も無う、たゞたゞ兄上へ一つの願ひ、この澤を片倉家より呼び戻して、もとの原田が娘と人にいはるよが今の身に、せめてもの念晴らし、原田の娘に立歸りし上は、よしや鬼ともなれ魔ともなれ、父上も在さず母上も在さぬ世に立ち給ふ一人の兄上に、妹の身が連れて唄はるよ前

世の約束、またこれも女ながら弓矢の家に生れし一つの哀れとやら、人の妻となりては良人への手前、その一門衆への辛さ、その家來どもに朝夕見らるゝ顔の苦しさ悲しさ、さればとて我まゝの自害もならねば、なう兄上、世に一人の妹、潔う心残りの無き生家の死場に歸し給ふか、たゞしは、なほ此上の生死の境に迷へとて、片倉が妻に捨て置き給ふか」

いひつゝ膝を進むれば、さすがの甲斐おもはず兩眼を閉ぢて唇端を噛み占めしが、やがてまた思ひ切つたる一念の顔色、くわつと見開く兩眼いと輝きぬ、

「父母まします頃に片倉家へ遣はされし和女の身、この兄が今更ら取戻しもなるまじ、またよく聞けよ、およそ女は嫁したる家を死場と心得、生家を忘るゝが却つて良人への貞節、但し小十郎が狼狽へたる性根より、甲斐が妹こよに去つたと言はれて來しか」

聞くや否や仙城隨一の美人いきくと張り詰めたる瞳を定めて、女ながらも武家生育の一念するくと押し詰めぬ、

「それほどに理解を知り給ふからは、何處までも白石の片倉が妻、改めて甲斐殿に」

「や、何かは知らず女の分際で原田一流の男に推參至極、そこ起てい」

いひつゝ自ら起つて去らむとする甲斐が袖を、妹の澤女そのまよ捉へて見上ぐる兩眼に涙たまぎりぬ、

「兄上」

「甲斐に妹は持たぬわ」

駒形の隠宅に人しれず療養の術を盡せし三人のうち、菅野小介は左の耳を削られたるのみの

淺疵、十二ヶ所の太刀疵ながらも悉く急所を外れたる片山隼人は醫藥の效能著しく、ただことに氏家平六は逆も一命おほつかなき深疵に加之も餘病を惹起して、はや七日目の晝頃より今宵こそと成り果てし一期の苦痛に、せめて最後の死水とらせむと甲斐みづから枕頭に侍りての介抱、されど平六さすがの勇士、たえて浮世を惜める風情もなく、また氣を取上せたる體もなし。

「今でこそ、委細うちあけて石田の手前も無事なれど、うち明けざる以前を言はど、あれほどの知己を捨て敵心を翻して、まことに道路一朝の縁、しかも其縁に縋りて美事の活動してからが、あはれ末たのみなき不運の我に斯くまでの心底、同じうは可惜ら生命、榮えて世に出づべき人のためにもならで、我から不忠不義に身を落すべき苦節の友連とは、深さも深き悪縁かな、さても氣の毒の至極、せめて今この甲斐に叶ふほどの義あらば、いう

て置かれい、やよ氏家、平六々々」

聲を潜めて耳朶に通ずれば、眠れる如き兩眼くわツと見開いて、枕を上げむとすれど首筋の深疵に叶はねば、たゞ靜に首肯くのみ、されど苦しき息の中より語る言葉は慥なり、

「さてもく、重ねく不思議の御縁、されば武士道の一命かくなつてこそ聊か御爲の一端をも盡せし心地、たゞ差し迫る此ごろの御先途を見届けざること、こればかりは何とやら無念」

「いや、心安かれ、我等が先途には我たゞ一人の活動、しかも道連には我を扶くる無二の味方よりも、却つて外に希望の道伴、やがて冥土へ追ツついて其面いちく見せうわ、されど今ことに暫時の後先、何をか言ひ残したき事もあらば、氏家たしかに聞くぞよ」

「花は散るべきもの、武夫が最後に今更ら何をか申し上ぐべき、まして親なし妻なし」

子なしとは流石に言ひ兼ねて思はず浮べし兩眼の涙を、甲斐それと汲み取って手を鳴らせば、

をりしも襖の外に泣く音しのびし哀れの露、差備いたるまゝに迂り入りぬ、
平六しづかに枕を蹴り代へて其場に泣き伏したる露が眞白の襟首より、誰が撫で下しけむ地

藏肩の邊しけくと、今更に見遣りながら、
「これ露どの、互に思ひも寄らぬ暫時の御縁なれど、いかう世話を掛け参らせて喃、この平
六は、もはや今夜が最後で御坐るわ、近う寄って、死水たまはれ、主人の殿よりは却って
恐れ、たゞ和女の手より」

いひつゝ露が手首そと取りながら、頬を傳うて枕に落つる涙を拭ひも得せず、
「天晴れ女の手柄もの、契りし縁は浅く連添ふ月日は短くとも、無雙の男を持つたは百年友
白髪の浮 なみくゝに勝りし幸福女、されば、この末、よしや如何なる珍事に出逢へばと

て、ゆめ見苦しき振舞を世に知らせまいぞ、や、女とて男とて身は一代、唄はるゝ名は末
代まで」

最初は自己みづから進んで飽まで盾をつきし大老酒井家へ俄に志を翻して慇懃を通じ、事
もし起らば眞先に捕へて血祭にせむとまで睨み落せし分家の兵部をも、今は幸ひの腰印籠と
して、一夜のうちに相傳の君を押し籠め参らせ、いまだ乳の香の失せぬ幼君に名ばかりの重荷
を負はせつゝ、辨之助の幼時より何とやら泰平無事の世を恨み顔なる不敵の原田甲斐いざや
本音を吐いたりけりと、本國の元老を始めとして五十四郡の諸士は固より、公私の業に就い
て十年以來の恩義を荷ひし江戸屋敷の藩士までも、一時に起って古今ふしぎの奸雄と叫び前
代未聞の曲物と喚く、もしや寸分の隙間もあらば忽ち組み伏せて刺し違へむとまで日夜に硯

ふ四面楚歌の中央に、五尺の身を置いて悠々寛々たる面魂の怖ろしさ、さてこそ天魔の原田と唄はれ鬼神の甲斐と傳へて囃されぬ、

されどこゝにまた幾萬の藩士中、たとひ奸雄にせよ曲物にせよ原田は天晴れ當世の大丈夫、甲斐は正しく泰平の世の英傑、よく用ふれば伊達家いよく繁昌を極めて末代磐石の礎となるのみか、もしや一朝の機運に逢はば政宗公の宿志を今に盛り返さむもの凡そ誰かあるべき、さるを葦の管より天を仰いで田舎氣質の一片に生れたる本國の元老が嫉妬偏執のあまり、また浮雲に等しき夢の榮華を願うて詔諛姑息に迷うたる江戸の腰拔どもが立騒ぐのあまり、あたら奇代の名薬を捏ちて忽ち毒石に變じたる大不覺、いはゞ千里の汗馬を逸して門外に馳せしめたり、されば十年の朝夕に互の人品骨格を知りつ知られて斯くまで交はりし我等が、今日は忽ち唄はるゝ奸雄の名を怖れ曲者の風聞に驚いて彼を捨て彼に反かむこと、そもく男

たるべき業でなし、武士冥利どこまでも諫めて後、もしや甲斐なほ聞かすんば其時こそ名乗あけて敵となるべし、もしや甲斐が本心まことの一節あらば、世に連れて陰囊を失うたる藩中の諸士へ幸ひの睡氣さまし、また我等が身に取つては臍魂を試さむ一期の思ひで今この機ぞ、あの原田を扶け甲斐に力を協して飽まで志を果さすべし、もろともに奸雄と唄はれ曲物と呼ばれても、心は一つ生命も一つとて、こゝに原田甲斐を護らむとするもの、まづ一萬石の伊達式部、八千五百石の津田玄蕃、八千石の茂庭主水、五千石の田村内藏助、三千五百石の吉田甚兵衛、三千石の劔持新五右衛門、二千七百石の福田五郎右衛門、千石の渡邊金兵衛を始めとして三百石の菅谷幸助に至るまで、いさゝか當世に拗ねて生れたる武者氣質、あるは平生より臍曲りとして憚られたる一癖者、乃至また原田が恩義を骨に刻まれたる男、甲斐が人品を慕うて善惡ともに與せむとする一徹者、年來おのれが胸の鬱憤を事のついでに晴らさ

むとするもの、とかく世上に事あれかしと腕を叩いて待ち受けたる不敵もの、以上あはせて百二十八人と註せられしが、あはれ甲斐が本心の腸を知つて涙と共に一命を捨てむとせし者ありやなしや、

さらぬだに本國にては、家も身も思ひ切つたる死物狂ひの武者を選んで二十一人まで人しれず追ひ上せつと、やをれ甲斐いかほどの男なりとて釜中の鱗類、もはや袋の鼠と思ひの外、その中の半は忽ち其場に殺され、残る半も深疵のまよの街道筋に斃れ、やうく浅疵を負うて逃げ歸つたるもの僅に四人、南無三寶と驚き呆れし眼前ごとくまた百二十八人の不敵者が手を連ね脛を揃へて甲斐を扶けむとの注進に、さながら暗闇の脚下へ怒濤激浪の押し寄せし心地して、舟も楫も用なき今は尋常地下の武士にて叶はぬ業なり、いざや四十八館の元老たる我

等が白髪首を並べて働くべき時節到来、日本三大名の其一たる伊達家の浮沈も此一舉にありと、おの／＼仙城の武者堂に額を鳩め膝を交へて老の涙を拭ひぬ、

さるにても原田甲斐、いかなれば斯くまで深き無類の奸毒とはなりつるぞ、近く三代以前の政宗公に仕へまつりし家系でさへ、譜代相傳と稱へて世に忠義の外は知らざるものを、遠き伊達家の祖先そも／＼常陸冠者爲宗公の御代に九州の原田與次郎種長が嫡流とて當家の侍大將を承はりしより、主従ともに幾度か世の盛衰を凌いで十七代うち續いたる舊家名門の一粒種、まして辨之助の幼時より奥州隨一の麒麟兒とまで唄はれたる其甲斐が、あはれ何事ぞや、さても／＼武運に盡き果てたる當家の前兆かと、中には老の一徹に聲を呑んで泣くものさへあれば、一座いづれも拳を握り血眼をあけて遙に江戸の空を睨みつと、おのれ甲斐が鬨の鉢に油を注いで火を點さずば奥州五十四郡の夜は明けまじとぞ叫びぬ、

世に聞えたる仙城諸士のうちに、同じ伊達の苗字を許さるゝほどの筋目に十二家もありながら、いづれも三代四代、さしても舊家といへど六代は越えぬ其中に、そもく九州原田の嫡流として客分に招かれしより幾百年の星霜、主従ともに幾世の盛衰變遷に伴うて十七代までも打續いたる名門、かくまで深き君臣一致の家に生れし娘の我身、まして今は奥州の脇立とも唄はるゝ片倉が妻となれば、弓矢神も照覽まします、女ながらも二十六の澤が一期の決心あはれ誰にか劣るべき、父上も母上も在さぬ今は一人の兄を親とはすれど、大義には親を滅すとさへ聞き及んで人となりし身が、まのあたりに斯る淺まししの世を見て何の生甲斐あるべきぞ。

平生は荒き風にも當るなよ、天晴れ親恥づかしき子を生んで奥州第一の手柄させよと、勿體なや世に又なき女と大事がられし我身が、今に始めぬ江戸の全盛を人しれず忍んで見物せよとて、添へ給ひし家來さへ原田家より召連れたる者どもを選んで、俄に旅立たせ給ひし良人が心のうち、推量りても事の九分まで知られけり、あはれ何として再び生きて國元に歸らるべきや、まして良人が家に歸らむこと、骨が粉となりし空吹く風に散り行くとも、この澤には神かけて成らぬ事、誓文々々どこまでも成らぬ事、かくと思ひ立ちては、よしや一人の妹が俎に乗りて生身を割かるゝとも、血の涙こそあれ流石に腸を斷つ苦痛こそあれ、兩眼じつと閉ぢたるまよの兄が氣質、なんとして諫めて泣いて聞くべきや、さりとして世上は善惡なきもの、我身の心も知れねば、をめぐゝ生き残りてあれこそ古今無雙の奸雄原田甲斐が妹ぞと、五十四郡の指頭にさよれ草刈る童が口の端までに譏られむこと、いかほどか口惜しかるべき、

されば生きて兄が悪業を見るよりも、早く死して冥土にまします父上に訴へ母上に泣かむこそ、せめて孝行の一端ともならむ、また甲斐が妹として一時も世に生存へむよりは、恐れながら骸となりて無言の申譯してこそ、兄が一夜の毒手に移され給ひし殿様へも、澤が志節の通ふ便りともならむ、つゞいては片倉小十郎とまでいはるゝほどの大丈夫に悪人の妹が妻ありては末代かけての名折れ、されば其手前だけにても澤が生命を捨つるに餘りあり、思へば思へば重ねくの深き罪業、六尺ゆたかの大男が百人千人の枕を並べて骨を曝すとも物足らぬ心地ぞする大事の場所に、女の澤がたゞ一命の墓場とすること、いとど却つて過分の幸福、あはれせめては美事の自害して一雫の血も疊には滾すまじ、

固より人しれぬ忍びの江戸なれば、傳馬町なる町旅籠に、わけて女性なればとて奥庭の離屋を借り切りつゝ、萬事宰領の家來には原田家より附き隨へる乳母が兄の吉川四郎左衛門六十

一歳と古く召使ひし侍女三人、外には片倉家より添へられたる若黨二人、以上あはして主従わづかに七人のみ、

涙と共に更け行く秋の夜も、いつしか曉近くなりけむ、はや大道には馬を追ふ鈴の音ちやらく、母屋の方には急ぎの客を送り出す大戸の音さへ聞えて、東天つぐる鴉の聲も何とやら今朝の此處には物の哀れを渡りつゝ、残んの燈火いまだ消えやらで隙間もる風に隣くも心ありけなり、をりしも澤女たゞ一人、しづかに旅の化粧道具を取り出して明鏡に對ひ、さらぬも仙城隨一の美人が今ぞ最後の紅粉を施して、用意の白小袖を身に纏ひながら、たしなみの名香を燻らしつゝ、九州原田の祖先より家に生るゝ世々の女性に傳へし伯耆安綱の短刀、ぬきそばめて容を改めたる風情、描けるが如し、

兄が一夜の毒手に移され給ひし殿様へ恐れながらの一通、本國白石の良人へ今更ながらの申

譯に一通、我身を瓊珠と心得たる吉川四郎左衛門へ頼み置く死後の指圖こまづくの一通、をりしも襖の外に人ある氣配、はつと驚いて白刃を背後に隠しつと、誰ぢや、誰ぢや、聲と共に襖しづかに押し開けて迂り入りしは吉川四郎左衛門、あぶるゝ老の涙を拭ひもあへず、そのまゝ見上げて聲を曇らしながら、

「こは何としての御生害ぞ、そもく此度の御旅立といひ、わけて前宵よりの御氣色といひ、御幼少より育て参らせし四郎左衛門、事の大方は存せぬ筈も無けれど、まさかに斯くまで迫り給はむとは、また警ひ如何ほどの大事御坐らうとも、餘人は知らず、この四郎左を捨てよまでの御生害とは」

いひつゝ猶も膝を進めて老の身を改むれば、さすがに女性の澤、今更に落つる涙を袖に掩ひつと、

「いふまでもない事ぞや、甲斐が妹として此まゝ國元に歸られうか、片倉が妻として此まゝ白石に戻られうか、せめては兄妹ながら心の黒白を世に知らさうため、第一には四郎左や恐れ多けれど殿様へ對しての申譯、これこゝに三通のうち、まづ汝に遺せし一通とくと見ても、もはや今となつては、この澤に物敷を言はしてたもんな、女ながら原田與次郎種長が十七代の末に生れたる澤、動かぬぞや、この姿このまゝ」

「さて、さても世に怖ろしの兄上を御持ち遊ばされし御不運の末、ゆめさら、をめぐゝ生きての後の御恥辱を勧め参らすべき筈なし、なれども、たゞ御幼少より乳を差上げし乳母が兄として、かく御縁の先様まで附人の四郎左衛門に一言の御沙汰もなく、一通の御遺書ばかりとは、また不肖なれど今年六十一歳の拙者、かうくと御うち明け遊ばされし上は、憚りながら同じ御生害にも、天晴の時機と場所とを申し上げむものを、何ぞやかゝる町旅

籠の片隅に、勿體なし、勿體なし、およそ男は千乗の家に生れても草を敷寝の骸を曝す方はあれ、たゞこゝに名門の女性たるべき御身、弓矢八幡、この四郎左この席にては、恐れながら亡せ給ひし父君となつて、罷り成り申さぬ」

「それならば四郎左、この澤に、いつまで生きて苦しめとか」

「御悼はしけれど、今日より十日のうちには四郎左め、かならず御案内申し上ぐるの覺悟、まづそれまでは何事も、思召さぬ御氣色にて」

こゝに人しれぬ主従が血の涙ありとは知らで、母屋の方には廊下の戸を引き開くる音、はや下女どもが起き出でて睡たけに唄ふ朝ほらけの投節、世は壁一重の裏表なりける、

その後は打絶えて御左右も御伺ひ申し上げず、ついでには思はぬ此度の出府を幸ひ、御多用の

中を憚りながら吉川四郎左衛門、久々に御意を得たしと、原田が屋敷の玄關へ申し入れぬ、をりしも甲斐は役所に出でむとて、はや衣服を改め尊を離れて身を起せしが、たえて久しき四郎左が出府、外に何の用あるべき筈なし、さては澤が旅の宰領して上りしものならむ、しかも亡父が鑑定もて妹の縁先までも附けてやられし律義一片の老人、あはれまた我を泣かせに來をツたかと思へども、逢はで追ひ拂ふべきものならねば、そのまゝ首肯いて一室へ招き入れぬ、

「や、四郎左、久しう逢はぬが、いつ見ても息災で重疊ぢや、定めて澤が何かと萬事の世話をかけるでがな、さ打寛いで此方へ、此方へ」

いひつゝ満面の笑を含めば、四郎左いよく慇懃に老の膝を疊んで額越に見上げつゝ、見れば思へば今もなほ何處やらに幼な顔の失せ給はぬほど、まのあたり凛々しさも彌増して天晴

の骨格、見事の男振、人は知らず我目には深き慈悲の露さへ溢れて見ゆるに、あはれ何として斯くまで怖ろしの性根とは成り給ひしぞ、天魔の業か、狂氣の沙汰かと、はや老の兩眼に涙うかべぬ、

「いよく御機嫌の體、何は儲置き、四郎左め、御祝儀を申し上げまする、さて久しく見上げぬうちに、かくまでも肖ますものか、御父君に其まよ」

「はよよよ父に肖て来たかの」

「御顔といひ、御聲と申し、それその肩を動かし給ふまで、まことに瓜を兩斷」

「であるかの、時に四郎左、汝は澤の供いたして參つたのぢやな」

「はッ、仰せの通り、此度の御供いたしましたの出府、ついでには御覽の如く四郎左も、はや取る年の老の影うすく、今年すでに六十一歳と罷り成りますれば、無常の風いつ何時とも

知れぬ身の果敢なき、せめて生涯これが最後と思召されて、こゝに一つの御願ひ」

「や、四郎左としたことが、汝にも似合はぬ一言、心弱しく、なれども、それほどまでに思ひ込んでの願意、何事にもあれ、この甲斐が身に受けて聞かうわ、じたい如何なる儀ぢや」

「今更ら申し上げずとも、御幼少より御乳を差上げし乳母が兄の四郎左衛門、憚りながら御妹様の儀は一命にかけても存する拙者、されば御先代様の御鑑定にて、澤が事は偏に汝を頼むごとて、かく御縁先まで附添ひ參らせてこゝに八年、さるところ御妹様こと、何と思召してやら此度江戸へ参りし上は、もはや國元へも歸られず片倉家へは猶更ら戻られぬ仔細ありとて、一途に御生害あそばさむとの仰せ、四郎左衛門いかに御止め申し上げても、さらに御聞き入れなき詮方なきのあまり、さらば一應、兄上様に御伺ひ申し上げての後と、かくの参上、あはれ願はくは、ぢき／＼に御對面あそばされて、御口づから御

煮見下されたく、もしまた御生害あそばさで叶はぬ儀なれば、淺ましき忍びの旅の町宿にて、人しれず死なせ参らせむこと無念千萬、同じうは、この四郎左めも老の皺腹の御供いたさう覺悟にて、この御屋敷の一室を賜はりたし」

いひつゝ涙を含んで見上げれば、甲斐おもはず兩眼を閉ぢて息を殺しぬ、

御幼少より育て上げ参らせし乳母が兄、まして御縁先まで附人となりて後見仰せ付けられしこの四郎左衛門が、はや取る年の波打際に一期の御願ひ、恐れながら御住居の一室を拜借いたしたし、女性ながら原田一流の御娘、片倉家の奥方ともいはるゝ御身を、人しれぬ町旅籠の片隅にて死なせ参らせむこと、七生までの無念心外と、聲を呑んで泣きながら老の膝を進めしかば、鎗襖に圍まるゝとも驚かぬ流石の甲斐おもはず雙の拳を震はしぬ、

「かく申し上ぐるうちにも、妹御様はや御越の筈、まづその以前に何とか御左右の御意を

伺ひたし」

いひつゝ老の身を屈めて迫り寄る折しも、取次の者いで來りて、片倉家の奥方これへ御入來とぞ告げぬ、

起つにも起たれず、居るにも居られず、平生は神算鬼謀湧くが如き身も、たゞ眼を閉ぢ腕を組んで黙然たるのみ、をりしも澤女しづかに入り來りて、四郎左と共に涙の顔を見合せて進み寄る疊さはりの音、胸に徹へて熱湯を呑む心地しながらも、あはれ斯くの世に斯くぞなりし男一代の人しれぬ 賜ことなりける、

「澤、何故やらむ、和女は生害の場所に苦しんで、この兄が一室を借りたいと申すけな、しかと左様か」

開きし眼に男泣きの涙は宿しながらも、凜として凄まじき顔色、射るが如くに睨みつくれば

澤女そのまゝ見上げて、

「何故、何故かとは兄上、さても、なさけなき御言葉、武門の家に生れたればとて、死ぬが人の花のみでなう、まして女の身の人にも逢はで奥に育ちし習慣、しづかに榮え行く家の繁昌を見たいが山々、なれども、今更ら言うて返らぬ事、たゞく、せめて同胞の御よしみに、この澤が生害の一室を、いかに御心に染まぬ女とて、淺ましき町宿の片隅に仆れし屍を、あれこそ原田甲斐が妹と指さよれて何と思召すやらむ、なう四郎左、嫁となりて良人の家を死場とするは女性の本文ながら、その良人の家にも歸られぬ身、生害には、うまれし親の家、親ましまさねば世取の兄上が御膝下で、なう四郎左」

「御悼はしけれど、逆も御生害あそばさずば叶はぬ今更、この四郎左が附添ひ参らすぞ、ここと一寸も動きめさるな、これぞ正しく御身様が生れの里方、いざ一時も早く兄上に御願ひ遊ばされて、お指圖の一室を、この四郎左も老の皺腹掻き切つて冥土の御供、もしや、もしや萬が一にも、ならぬと仰せられなば致方なし、女性の御身ながらも十七代うち續きし原田が家の娘、今は麻布に御隠居あそばさるゝ殿様の御門前にて、御生害あそばす分のこと」

いひつゝ左右より迫りくる中に、甲斐は閉ぢたる兩眼を開いて、腸より絞り出せし最後の一言、

「むと、しかと承知いたした、希望の一室、貸さうわ」

我ながら古今に凡例あるまじき苦節の段々、人しれぬ年來の本心かくぞと打明けて語ればとて、思ひ詰めたる女の一念と凝り固つたる老の一徹、今更ら何の詮もなし、詮なきのみか、

もしや一步を誤れば萬事の破滅、うたかたの水の泡とやならむ。
 また我本心を知らぬでもなき上に萬事の分別ふかき片倉ほどの男が、わざと輕々しう最愛の
 妻を忍んで江戸へ上せし心中、おもへば道理、女なれど矢竹心の思ひ切ッては返さぬ原田が
 娘、このまゝ逆も白石には無事に居るまじきものと心得ての業、されば同じ死すべき一命を
 國元の片田舎に捨てゝ甲斐が妹といはるゝが恥づかしさに生害せしと呼ばせむよりは、今
 を盛りに傍若無人の悪人と唄はるゝ兄が膝下に諫死の花を添へむがためなるべし、あはれ言
 はほど通ふ心と心は一つ、現在の良人として死装束の妻に打明けぬ手前、我また兄として他
 家に縁づいたる妹に仔細うち明けらるべきや、たとひ腸が九廻して吐く息の炎焔になれ
 ばとて、噛み合す齒の根が粉になればとて、
 「なるほど、原田が娘、甲斐が妹、片倉が妻ともあらう身が、淺ましの草の蔭にも死なれま

じ、さらば澤が希望の一室、この兄が貸さうわ、外にも及ぶまい、この席このまゝ」
 いひつゝ兩の拳を握りつめて、ぬツと起ち上りし顔を、今更ながら呆れ果てたる澤女と四郎
 左衛門、おもはず右左より見上ぐれば、さすがの甲斐も胸に迫りくる一期の男泣き、あはれ原
 田の家もこゝに最後の滅亡、あとに残りて誰が手向の草や結ばむ水や供へむ、君が馬前の働
 きには百萬の剛敵を引受けて粉となるも面白けれ、さるを泰半無事の世に入しれぬ腸を絞
 ツて泣く音も叶はぬのみか、やがて屍を萬人に鞭たるゝ前まづ肉身の一人の妹を見殺しにす
 る苦しさ辛さ、すまじきものを弓矢の家の奉公とは何者が唄ひけむ、
 「澤、さらばぞ、四郎左さらばぞ、眼前さし迫る用に追はれて急ぐ身ぢや、それとも一世の
 餘波に盃とらさうか」
 彌陀佛々と念じて左右を見下せば、澤女いきくと張詰めたる眼に口惜の涙を浮べながら、

「一室さへ、いや、さらしく兄上には借り受けぬ一室、こゝに澤が生家の一室を定めて、清き生害の最後に、汚らはしや悪魔に等しき盃など、それ四郎左、用意しや」

「仰せにや及ぶ、こゝは御生家、見事に遊ばせ、この四郎左も御供いたさう」

生き残りて萬人の口の端に甲斐が妹と呼ばせむよりは、今こゝに悪人の兄を諫め死せし天晴の妹と呼ばせてこそ、せめて今の我身が心の申譯ぞと、一念おもひきつたる甲斐が顔色、宛がら死毒に中てられしが如く、眉を逆立て鼻を皺め半眼の目に血の涙を含みつとも、さらに振り返つて歩も停めず、鬼とぞなりて庭下駄しづかに飛石を傳ひ、立關の横手なる柴折門を出てむとすれば、堪へく見送りし四郎左衛門、さしち堪へ兼ねてや、追ひ來りて甲斐が面前に立塞がり、やがてまた大地に坐して老の涙はらくと滾しぬ、

「四郎左よ、そこ退け、妹が生害の後見に手後れしようぞ」

いふ顔を四郎左衛門しげく見上げて老の泣く音を含みながら、

「此方様の、その御聲は五體のうち、そもくいづれより出ますぞ、國元にては古今無雙の奸物、原田十七代の忠功を一時に揉み潰す大悪非道とまで立騒けど、御幼少より朝夕、親しく見參らせたるこの四郎左、いかに天魔に化し給ふとも、つやくさらに合點いたさず、高木は風に憎まるよの假令これぞ正しく多年嫉妬の偏執より起りし取沙汰、また殿様御隠居の一事に就いても、恐れながら人しれぬ深き御仔細のあるべき儀と心得しは、無念や全くの相違、おもひきや我おろかの最頂目、現在こゝに肉身の妹御様が、あはれ世には唯一人の妹御様が、諫めて叶はぬ果の御生害あそばさむとする最後の痛はしさを、雀の子が軒より落ちて死せしとも思召さぬ御様子、見向きもせいで其儘いづれへか行かれうとは、さてもく、なるほど、譜代相傳の主君を一夜に押し籠めて何とも思はぬ古今ふしぎの曲

物ぢや、さ、そこ退けと仰せられても退かぬ四郎左衛門、うち殺して此場を通らッしやい、四郎左が打殺さるゝ一期の悲鳴が相圖ぢや、あの、あの一室にて忽ち御生害あるべき約束、女性ながら後見なくては自害を得せぬ狼狽へた御心には育てあけた覚えなし、後見の手後れなどと入らざる無用の口を叩かるゝよりは、この老人を蹴殺して後、かねて希望の地獄の底へ行かるべしぢや、もはや原田の嫡流とは思はぬ、なさけなや悪魔め外道め、五體いづこの隙間より喰ひ入ッて天晴この男振を潰しをッたぞ、あゝ此方様を育て上げた傳役の藤左衛門、今なほ生きてあるならば、あはれ如何なる泣く音を立つべきや、御出世の花をも見知らで病死せし不幸者と思ひしは、今となつて羨ましい、なれど斯る言葉も其お耳には入るまい、さ、蹴殺して通らッしやい、鬼の目にも涙とやら、もし蹴殺す機がなくなば、この四郎左より斯くぞ、汝ッ

叫ぶや否や老の一徹に起ち上ッて、甲斐が胸襟むづと引ッ掴みたるまゝ小兒の如く一聲ワツと泣いて武者振つきぬ、
いかなる剛の者が必死に組み付けばとて、片手に攔んで宙に抛け飛ばすべき不敵の甲斐も、老の身の仆れて怪我させじと、咽喉を締められながら靜に四郎左の身を抱いたるのみ、さても涙は瀧津瀬、

あはれ一夜のうちに榮枯盛衰を唄はれて今は麻布の下屋敷に隠居の身、先代綱宗の許に夜更け人定まりて後、忍んで女乗物の通ひし主は誰、かねての打合せやありけむ、そのまゝ奥庭に昇き入れて小書院の一室に入りしは原田甲斐なりける、
もとより四邊の人を拂うて、燈火さへも眠るが如く閑なる秋の夜に、後の世までも知られぬ

涙を含んで主従たゞ二人、

「や、甲斐、待ちかねたぞ、何は儲置き、その後の次第は如何ぢや、此程よりの苦心さぞか
しと思ふぞよ」

「はッ、まことに御心柄でもなき今の御住居、昨日の御館に引代へて恐れながら御心中の段
段、ついでには不肖の甲斐め、はゞ一時も早く、雨ともなれ風ともなれ願ふは更に新なる月
影とのみ日夜の念願ことに届いてや、案に違はず、かねて申し上げし通り、いよく、本國の
元老衆うち揃うて俄に出府の風聞、わけて安藝が出頭の上よし、つまるるところ、この甲斐が
悪事を數へ立てよ公儀への訴訟沙汰」

「あゝ儲、いよく左様になつたか」

「もとより覺悟の次第、申さば此方より望みの通り、かくてこそ天下無雙の下馬將軍に鼻を

あかせて分家殿の横車を白洲の砂礫に打碎く苦肉の一計、御家は更に萬々歳、たゞ靜に喜
怒哀樂の御顔色を忍んで御覽あそばさるゝやう」

「されば甲斐、もはや汝に逢ふ事も、むづかしからうの」

「はッ、これぞ今生の御暇をかたく、參上の甲斐、いづれ事の落著となるべき間際に、いさ
さか御耳を驚かし參らさでは叶はぬ次第も、出来るかのやう心得ますれど、その砌には
猶更の事、萬事に就いては此度の善惡ともに存せぬぞ、予は唯これ隠居ぢやと一途に仰せら
るべく、まづ江戸一切の儀は、甲斐が悪業の屍となつて事の濟むべき筈、また本國の儀は
白石の小十郎、彼さへ無事に罷りある上は、大方の御心勞は御無用のこと、たゞく、行末
の御養生のみ御大切に遊ばされて、百千歳の後までも御安樂の程を、草葉の蔭より仰ぎ奉
りまする」

「かさねくの心勞、偏に察し入る、さても十七代うち續いて世上いくたびの盛衰變遷に伴うたる原田の家も、汝が今の身となつて人しらぬ苦節孤忠の滅亡、おもへば主ながら冥加おそろしい、されば甲斐、何事か思ひ残す儀もあらば、また言ひ残す希望もあらば、綱宗が身に代へて立つるぞ」

「はッ、有難きまで忝き御意、されど、されど原田が家の血筋としては世に唯一人の妹まで、涙を呑んで見殺しに致したる天魔覺悟の甲斐、これぞ、まことに命運の盡くるところ、たとひ如何なる思召を下さるゝとも、もはや人力には及ばぬ時かと心得まする、さればこそ、これほどの悪人奸物と唄はれて始と叛逆に等しき大事を企つる體の甲斐が身に、一人の味方と申すべきものもなく、不敵にも天下の白洲に對うて一身一體のまよ、却つて多くの元老衆を相手に致さむとする始終の次第、せめて後の世に、おはれ悪人としては何と

やら訝しき男ぞと、たゞ一つの不審うたるよが最後の色香、恐れながら心體かくの通りに御坐りますれば、なまなか甲斐への御恩は末代まで御家動亂の基」

「さりとは甲斐、あまりに遠慮すぎるぞよ、心強いぞよ」

「これほどの大事なればこそ、さらに一人の味方も頼まず、また一人の血筋も残さぬ甲斐に、今更ら御無用の御仁義、たゞこの後の御保養專一に祈り上げまする、いざ然らば、今生の御暇も賜はらむ」

「せめて盃いたさう」

「はッ、御意なれど、いはど武運に盡きたる最後の者に御盃は御行末の不吉、あはれ願はくは御秘藏の名香一種、いかならむ死の果にも甲斐が肌への御願ひ」

「や、悲しい事を申すわ、進め甲斐、進め、されば予が手づから汝の肌に移さう、家に傳へ

し浮寝の鳥の名香を」

「はッ、はッ」

家も身も名も諸共に打捨てよ、草の葉末を轉がる露の生命にあはれ何をか申し上ぐべき何を
か望み参らすべき、たゞ原田甲斐が聽て萬人に指さし笑はるべき最後の肌、せめては骨ま
で馨らむ名香を賜はりたしと、不敵の大勇こゝに涙を含んで乞へば、綱宗も目を瞬いて秘
藏の名香うきねの鳥、家傳の仔細は言はずとも知るべき筈と、武野紹鷗が荒削りの香匣もろ
とも取出しぬ、

浮寝の鳥は諸家にも聞えたる伊達家秘藏の名香にて、一夜、政宗が人知れず召されて桃山殿
に伺候せし時、太閤みづから茶を進めて物語の末に、今こそ天下は我物なれど、尾州愛知郡
の草叢より飛び出でたる匹夫の我、武家に取つての系譜もなく文家に取つての傳來もなけれ

ば、よしや十人の子を持つとも凡そ我こゝに一代の天下ぞ、附き従ふ手許の大小名また我と
同じく下郎の一代身上、やがて流るゝ年と共に我こゝに目を閉づる頃は彼等も老いて枯れ枯
れになり行くべき時を見澄し、この天下を此まゝ攔むべきもの、そもく見渡す當世に何者が
怖ろしきぞ、試みに名を書いて見せよ我も書かむとて、互に認めたる文字は徳川家康の四字、
太閤おもむろに首肯いて、政宗の耳に口を寄せながら、何事をか約束のしるし當座の引出物
に賜はりたる名香、されど如何せむ、あはれその約束を果し得ざりしとて、政宗が最後に半
を京都の阿彌陀峯に返し参らせ、残る半を傳へて伊達家三代の今は、古今無雙の奸雄と唄は
るゝ甲斐が人しれぬ涙の袖に包みぬ、
いざ然らば、これぞ今生の御暇乞、たゞく行末の御繁昌を草葉の蔭より拜し参らせむと、
しづかに坐を起ちて庭に出づれば、さすがに十七代の主従、まして凡例なき苦節孤忠の影と、

綱宗みづから手燭を取って送り出しぬ、

「甲斐、念に及ばず萬事の覺悟は宜いの」

「はッ、不肖ながら男一代の嵐に舞ふべき落花の砌」

「さもあらう、して本國の元老共たしかに近日出府と定まりしか」

「此頃の風聞にては安藝を筆頭に石川葦名天童の三人が附添とのよし、なれども安藝は仙城一の老骨、なか／＼斯る大事に他人を煩はすべきものにも御坐らねば、必ず自己一人引受けての出府なるべしと心得まする」

「して／＼、つまるところ安藝を何とぞ致すぞ」

「不惑なれど、氣の毒なれど、事の次第に依れば、あの老人をも冥途の道伴」

「やッ」

「お家浮沈の大事に御坐れば、いづれ一人二人の相手を傷めぬ上は、さす本敵に手も届きかぬる仔細、あはれ靜に御賢察を仰ぎ奉りまする、はッ、はッ、あまり伊達家の無事は却つて後日の不爲、物の七分までは甲斐一人の屍にて相濟みますれど、あと／＼十分の儀には、めほしき當家の武夫三四人は、いづれの道」

麻布の隠居綱宗に今生の暇乞ひして後、まだ乾ぬ涙の甲斐そのまゝの女乗物を、更けゆく秋の夜の霜や置くらむ途を急がせつと、曉かけて人しれず駒形の隱家を訪れぬ、今夜は君の來ますべきぞと、かねての通知に露は枕も得取らで、おもへば／＼何とやら此ほどの遣方もなき身一つを、しよ／＼ほりと燈火の下に堪へ兼ねてや、物の本など繰り擴けて氣を紛らさむとすれど、あやにく空に鳴き渡る雁金の聲に哀れを誘はれつと、我にもあらで身

を起して中庭に立出づれば、有明の月影あはく木の葉を漏れて、かき集めたる心の節々いと
ど悲しげに、君來ずば寢屋へは入らじ小紫わが元結に霜は置くとも我が元結に霜は置くと
も、はや東天も近からむとするころ、路地を歩み來る足音それぞと駈け寄れば、門の戸ほと
ほとと叩いて、こりや誰ぞ居る、こと開けい、聲をも待たで戸を引き開ければ、はや消えか
かる曉方の月代に笑を含みし甲斐が面色、すつと入りて軽く肩を撫でながら、

「や、露か、さて今頃、こよに何を致して居るぞ、無用心」

「あまり夜長の寢覺勝が苦しうて」

「はよよよよよ、いつもながら小兒心ぢや」

そのまよ伴うて例の一室に入れば、残んの燈火うすき影に反いて、床柱の此方に主なけれど
露が心待ちの設け、しづかに甲斐が蓐を敷きつよ、葦屋釜に松風の音さびて、よろづの用意

何とやら物の哀れも立添ひぬ、

「露、幸ひ釜の湯もあるけぢやの、一服の手前を立てよ、あよさて今夜は草臥れた、明日は

一日こよで骨を休めて、久しぶりの魚釣ぢや、みごと鯨でも釣り上げて見ようわ、はよよ

はよよ」

いひつゝ風呂に立寄りし露が後姿、眞白に細き頸首へ黒髪の一筋二筋わざとならず亂れかよ
りし風情、さてもくゝいぢらしき女かな、あはれ武夫も武夫、かくまで不運の我に册いて、
一死の後には何とぞなる、たまゝ逢ひし生みの父を父とも得呼ばで俄に失ひ、友白髪の末

までもと佛神かけての我に懸ての手向草、露とは誰が名づけけむ、

空には有明の月あはく、家には残んの燈火かけ薄く、曉近けれど人の起き出づるには程も
あり、秋ふかけれど木枯の窓うつには時もあり、たゞ靜に物あはれなる心と心の通じて、い

つになき甲斐が眉を蹙めつゝ沈み勝なる體、わけて此頃の憂節に遣る瀨なき露の身の淋しけなる風情、平生は枕を敬て夢心地に聞く曉の鐘さへ戀の外なる恨みの一つに數へぬ、

「露、こりや露、今更のやうなれど、しみく心に汲み分けて、よく聞けよ露、そもやこの甲斐には十年以來、家も身も賭けての上、人しれぬ大望あつて、日夜に肝膽を碎きし今日までの策略、もはや成敗ともに打出さでは叶はぬ時節到來ぢや、ついでには平生それとなう餘所ながら事に寄せて汝に言ひ聞かせし如く、およそ我ほどの武夫を男に持ちて冊く上は、よしや花鳥風月の外に事なき太平無事の世なりとも、いつ何時いかなる大事の此身に及ぶやらむ、かねての覺悟つねくの心得が專一、あの氏家平六が最後の枕頭に汝が手を取つて、くれぐれも諭せしは此事ぢや露、さて今こそ、その覺悟と心得の入るべき時ぢやぞよ、もしや甲斐、武運に盡きて果てもしつらむ風聞を聞かば、汝なんとぞするぞ、まづそれを聞

かせい、こりや露、涙は汝が目より滾るよばかりのものでは無いわさ」

萬夫不當の甲斐も、おもはず兩眼しばたよいて燈火の影に反けば、さらぬも何とやら重ね重ねに此頃の氣遣はしさ、また餘所ながら漏れ聞きし言葉の端々、また不意に淺疵深疵を負ひし人々の上まで彼れ是れ思ひ合して、逆も尋常ならじと胸おどろかせし露か心、今更に悲しさの彌増して堪へずやありけむ、君に後れ參らせて片時も、このまゝ生きてあるべき露とや思召す、その御心の恨めしやとばかり、涙の隙より絶えくゞに漏らせば、甲斐なほも膝すり寄せて泣き伏す露が背を撫でながら、

「さても可哀の女め、うき世なみくくの男には添はで、なんの不運ぞ、原田が寵となつたる、こりや露、あはれ汝に百年安樂の財を添へて諭すは易き事、又この色香もて世に求むれば玉の輿いつとても外れぬ身ながら、もはや他には嫁くまじき一念、それを見抜いての上ぢや、

こりや露、同じ我ために捨つる生命、そのまゝ生存へて後世を弔ひくれよ、さりとて修羅の
 妄執を助からむがためでもなく菩提の果を得むの心でもない、いづれ世上に唄はるゝ甲斐
 が一死の後に、せめては残す記念の一事、鬼神も泣くべき汝が哀れの姿を見せて、花は散
 るとも香は失せぬ梢の色を、もろともに砕いては、あまりに本意なし無下に情なし、され
 ば死して急がむよりは生きて世に後るゝこそ却つて操も長き道理、おもへば喃、昨日今日
 と過ぎて、はや三年あまり、みじかき契りに行末ながく苦を見する事ぢや、あゝさても不
 運の女よ、世に男の数はあるものを」

ふけゆく秋に露けきものは草木のみかは、やがて散り行く空にも木枯の音ちりぐゝと人の身
 の上、されば原田甲斐また世に知られぬ涙の露を袖に包んで、鬼神も泣くべき苦節孤忠に一死

の曉を待つとも知らず、本國仙城には伊達家の歴々さては五十四郡より選ばれたる諸士の
 面々、いづれも額を鳩め膝を交へて日夜の評議に寸暇なく、中にも氣早き徒輩は物の具とり
 出して妻子を山里の親類縁者に送るなど、さながら今にも合戦の起らむ如く立騒ぐ有様に白
 石の片倉小十郎おもはず眉を擧めて、南無三寶、あまり藥が利き過ぎては却つて後悔の恐れ
 ありと、今は堪へ兼ねつゝ自から音頭取となりて、訴訟沙汰の一點張を叫びぬ、
 なれども將軍家の目代として天下の大小も心のまよなる酒井家が後楯、横車とはいへ正しく
 政宗公の一子たる分家の兵部しかも今は後見の野心、そのみでさへ由々しき大敵なるに、
 多年江戸一切の支配に馴れて内外に根を植ゑ付けしが上に、赤裸として大道の中央へ突き出
 すとも古今稀有の怖るべき奴、その原田甲斐めが以上の羽翼を添へて逆様に我等を待ち掛け
 たる體なかゝ一筋の繩にはかゝるまじ、よしや百條千條の鐵鎖にても覺束なき大敵、なま

なかに訴訟沙汰として待ち掛けたる網にかよらむよりは、人しれず先代の綱宗公と當代の龜千代様を竊に本城へ迎へ奉りて、主従もろとも一致の覺悟、たゞ一途に合戦籠城の用意せし上、あらためて伊達家風の通り一刀兩斷の處置を公儀に願ひ出づべしといふもの凡そ諸士の七分なりける、

されど片倉が言葉には、それこそ反逆となつて敵は酒井家と分家と甲斐のみでなく、正しく台命に反いて天下に弓を引くの體、籠城合戦の二年三年を持ち堪ふればとて何の効かある、さる危き事を我から急いで招かむよりは、元老のうち一人二人こゝに死を極めて公儀に訴へ、事もし破れし曉は固よりの覺悟、さても何人ぞ斯の重任に當るといへば、伊達安藝すよみ出でていふ、誰彼といはむより我まづ犠牲となつて當家の浮沈を定めむ、今年六十一歳、もはや浮世に餘命なき幸ひの死晴れ、かねてより原田が罪狀二十七個條を認めたりとて懷中よ

り差出したる目安一通、これぞ五十四郡の興廢存亡の指南車とぞなりぬ、

本國仙城に額を鳩めし日夜の評議も、片倉小十郎が堪へ兼ねて最後の一言、やうく十三度目に事定まりて、老輩筆頭の伊達安藝が訴人となりつゝ、原田が罪狀二十七個條の目安を讀み上けしとの仔細、早くも甲斐が許に聞えしかば、甲斐おもはず舌鼓を打ち眉を擧めながら、あはれ不覺の人々かな、いはゞ天下の大老と血統の分家を兩の手に握つて多年江戸の内外一切を職とせる我ほどの大敵を引受けながら、五十四郡の歴々が日夜の評議まち／＼十三度目の果に決せしとは、危しく、我もし實に非望野心を企て、深く謀るものならば、酔へるが如く眠るが如き彼奴等が今更の訴訟沙汰そもや何の功かある、かゝる不覺の徒輩が譬ひ合戦籠城に決すればとて、將軍を敵とし天下に對うて一年は愚の事、ものゝ半月も堪るまじ、さても

さても四海に轟き渡りし奥州の伊達家とは名ばかりぞ、いつしか肉は弛み骨は瘦せて政宗公より僅三代の今すでに斯の如し、やれ危しくと、眼前に迫りし我身の一死を忘れて流石の甲斐おもはず身を震はして恐れぬ、

兎にも角にも伊達安藝が訴人となつて、我身の罪状二十七個條を數へ立てしとは、逆に取つて順に守るべき伊達家の行末まづこゝに安かりけり、いざや此上は本尊の兵部が腸、じたい斯人も口ほどになき不覺の老體、たゞ虎の威を藉る狐の類なれば、事に驚き易く物に悔い易く、もしや中途に勇氣を失ひ初志を翻さば、あたら苦肉の神算鬼謀も水の泡とやならむたゞ今となつても心丈夫は酒井雅樂頭、おのれが權威に誇つて人を人とも思はず、生れついたら不敵の活氣に事を事ともせず、前後左右に騒つての横紙やぶり、もはや念を押し勢ひを添ふるの用はなけれど、唯こゝに分家の兵部が腰骨を固めし上にも固めずば叶はぬ事と、一

夜竊に例の女乗物を急がせぬ、

原田甲斐しので參上の上よし、聞くや否や兵部みづから廊下口まで迎へ出でて、さながら遠來珍容の待遇ふり、これへくと手を取らむばかりの慇懃さ、奥ふかき一室へ誘うて四邊の人を拂ひつと、抹茶の手前いざとて侷めぬ、

「此程より段々の苦心、酒井家の石田よりも聞き取つて、いかう薄足に存するぢや、聞けば本國の者共いよく出府の上よし、定めて公儀への訴訟沙汰となるべきが、さて何者が訴人の本尊やら、お手前、聞き申されぬか、あはして此上の事、何分にも頼み入る」

「御言葉の通り、いよく今度、訴訟沙汰と相成り、その訴人義は涌谷の安藝一人、まづこの甲斐が二十七個條の罪狀を認めしとの風聞、つまるところ安藝と甲斐との對決でがな御坐らうまよ、お心しづかに在しませ、不肖ながら甲斐かくてあらむかぎりは、四十八館の

徒輩が鬨を作つて血眼に押し寄せ來るとも、片頬の笑渦に迎へてと存せしところに、何ぞや草叢の葉蔭に老老れたる安藝一人とは、あまり物たらぬ心地いたして、下世話に申す張合ぬけの體、はよよよと同じ一人の訴人ならば、せめて少しの齒にも觸るべき片倉小十郎など出府いたすことか、安藝とは案外」

「はよよよとお手前の器量に安藝は、なるほど、氣の毒ぢや、じたい本國の者ども何と心得居るやら」

「いはゆる盲目の蛇に恐れぬ譬へ、なれども油斷大敵、ついでには今夜參上の仔細、餘の儀でも御坐らぬ、もしや訴訟の成行に依つて、よしや如何なる珍事出來いたさうとも、上に雅樂様あらせられて下に甲斐が息の根あらむかぎり、いづこを風が吹くとや仰せらるゝ風情にて、どこまでも御動き遊ばされぬ御工夫專一、また次第に依つて訴訟の場所へ御出座の事

ありとも、萬事は甲斐一人の取扱ひと、たゞ何事も甲斐に御かぶせ下さるべし、勿論、甲斐が骨身を碎かるゝ苦痛ありとも、御身様を呼び出さすべき狼狽へやうは神かけて仕らぬ覺悟ながら」

いひつゝ主人の面上を見れば、兵部おもはず座を乗り出して、
「や、天晴れ名物、頼むぞ〜」

元老打揃うて俄に連名の訴狀を起せば、いたづらに本國と江戸の二派に分れて騒動するのみか、本國の我等に心を寄せて原田の野心を悪みし江戸屋敷の者どもまで、やる瀬なき武門の意氣地に果は翻つて敵となるの恐れあり、かつは藩士騒動の一事をもて酒井家が心のまなる台命いかならむほども危し、また空しく本家と分家の争ひとなりても、つまるところは

成敗ともに伊達家破滅の基まづそれよりは、こゝに本國の名代として伊達安藝、目指すは江戸一切の名代として原田甲斐、おのゝ一騎打の訴訟に勝負を決せし上、もし叶はずば更めて其後の策略を廻らすべしとて、さてこそ老輩の安藝一人すよみ出でて原田一人の罪狀二十七個條の目安を立てぬ、

されどまた安藝に私語く者あつて言ふ、そもく甲斐ほどの男は彼奴一人とて由々しき大敵なるに、ましてや天下の目代たる下馬將軍を後楯とし今は後見職たる分家の兵部を前楯として、多年江戸一切の内外に根を植ゑ付けて待ち構へたる中へ、軽々しく老體の訴訟沙汰は薪を抱いて火に臨むが如し、うかく慌てよ出でなば忽ち設けの穴に身を落すべし、さればまづ譜代腹心の兩三人を竊に江戸へ上して、月番老中の手許まで訴狀を差出せし後、その吉凶に應じて徐ろに出府されむこそ、時に取つての萬全の策ごと、きくより安藝が分別またこれに

定まりて、かゝる大事の用に立たむもの誰彼ごとと詮議の上、眞田求馬、石原忠四郎の二人に熊田甚五兵衛を差添へて、寛文十年戊の十月三日、日本三大名の隨一なる伊達家の興廢存亡を含みし一片の訴狀は人しれず江戸の空に飛び行きぬ、
眞田求馬石原忠四郎の兩人は、安藝が譜代恩顧の郎黨、しかも四十八館の家臣中に武術者として唄はれ分別者として囃されたるほどの男、差添の熊田甚五兵衛は安藝の妻女の末弟、熊田流として仙城に一派を開きし鎗の穂先には飛び行く雀を刺すとぞいふほどの男、三人おのゝ生血を啜つて誓ひを立てつよ、もしやこの訴狀を途中に奪はむとする事もあらば、腹搔き切つて臍腑の中に揉み込むべし、もしも出府の上に取り上げざる曉は、二十七個條の文言いちかく三人の血に書き替へて再訴すべしと、弓矢八幡、五體の骨節を叩いて誓ひぬ、
かくて四十八館より一粒選に選り抜いたる二十一人決死の男が氏神に誓を立て妻子に水盃